
花卉の舞う坂

夜神 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花弁の舞う坂

【Nコード】

N6967N

【作者名】

夜神 蓮

【あらすじ】

病気で部屋から出ることを許されない少年、俐桜^{りおう}。俐桜は窓から見える坂道や、代わりばえしない毎日の暮らしに飽き飽きしていた。唯一の楽しみは少しの変化をカメラに収める、それだけだった。しかし、ある日坂道の桜の木の下に誰かが立っていた…

第一楽章（前書き）

病気で部屋から出ることを許されない少年、俐桜^{りおう}。俐桜は窓から見える坂道や、代わりばえない毎日の暮らしに飽き飽きしていた。唯一の楽しみは少しの変化をカメラに収める、それだけだった。しかし、ある日坂道の桜の木の下に誰かが立っていた：

第一章

自分の部屋の一番左の窓から見えるこの坂道、この坂道に今日は誰かがいた。

春には桜並木、夏は蝉の鳴き声が木霊する緑の坂、秋は橙色と朱色に色付く紅の坂、冬には積もった雪に残った足跡を記録する坂。視覚的には見えていて、とてもおもしろい坂道だ。毎日同じ人が同じ時間に通る、違う人が初めて通るのも見える。間違え探しのようで、正解のないクイズのような坂道は、田園風景の中に同化しつつ空と山の境目を残しながら静かに時間の流れていく。

穏やかな雰囲気の中、慌ただしく歩いていく人を見てみると初めは楽しかった。しかし自分はこの坂道をもう5年も見続けているからか、そんなことはもう思わなくなってしまった。思わしてくれるような出来事がこの5年のうちに一回もなかった。きっとこれから起きることはないのだろう。

窓から見えるものはすべて、どんな物もどんな人もどんな風景も、もうすべて飽きてしまった。単に飽きたのではない、こうすることしかできない自分に嫌気がさしたのかもしれない。

その日、その日に何かが起きる訳でもないし、だからといって昨日と全く同じでもない。その中途半端差が余計に俺の興味を薄れさせる。

部屋に小さく流れているクラシックも、もう覚えるほど聞いている。これもすべて毎回同じ音、同じテンポの音楽だから飽きてしまったが、後ろで小さく流れているこの聞き慣れたクラシックがとても心地よいっと言うのもあるが、何故か毎日起動スイッチを押してしまう。

窓際にあるベッドに座ってここから見える唯一不規則な動きをする

雲の流れを見ている。膝の上に乗せた手の中にはちよつと古いカメラが収められていた。これは、変化する物を変化しない紙に焼き付ける機械。それを持って毎日この窓からあの坂を見下ろし、おもしろい物や変わった事があれば記録する、これが俺の日課であり趣味であり、俺ができる行動の中で一番楽しいことだ。

ベッドにもたれ掛かりながらカメラを手にし、いつもと変わらない窓の外の風景を眺める。山の向こうに浮いている雲、おもしろい形をしているがどうもシャッターを切る気にならない。

今日は日差しが暖かいから窓を開けたのだが、風はまだ冬が残っていたようで今は少し寒い。

しかし、窓を閉める為にベッドから立ち上がり、窓を閉める元気も気力もなかった。

今日の空を眺めるのも飽きたことだし、そろそろ布団に入ろうかと思ったとき、部屋の襖が開いた。入ってきたのが誰かと知っていたながら襖の方に顔だけ向けるとそこには予想通り母親が立っていた。

「俐桜、そんな薄着で起きてたらまた風引いちゃうわよ。ほら、速く布団に入って。」

母親は、手に持ったお盆を机に置き、ベッドに座っている俺の元まで歩いてきた。

母親はこうやって俺の事を気に掛けてくれる。でもその気を掛けてくれるのが正直うっとうしい。この年になるとだれにでもある思春期っというものだろう。

でも、俺はこの人に迷惑をかけ続けているから、何も言えないし、じつと彼女の言うことを聞くことしかできない。またそんな自分にも嫌気がした。布団に入りながら母親に渡された固体の粒を水で流し込み、服の袖で口を拭う。母親は俺の渡したコップを受け取り少し微笑みながら俺の横に座り、布団の上にだらんと乗せている俺の

手を握った。

母親はよくこうやって俺の手をよく握る。俺はこの手には何度も助けられ、救われたことがある。

「じゃあ、俐桜もうすぐ先生が来るからちゃんと寝てるのよ。」

母親はそう言って手を離し、お盆を持って部屋から出て行った。もうすぐ四時になる、この時間帯は学校から帰ってくる生徒が田んぼの向こう側で賑わう。その声を羨ましいと思いつながらカメラに手を伸ばす。少しぐらい良いよね。

体を起こし、カメラを手に窓まで歩きカメラを構える。レンズには田んぼの中に楽しそうに話す生徒が写しだされ、シャッターをきる。俺だって五年前にはあの生徒たちみたいに元気に走っていたのに……クラシックが心地よく流れていてちょうどいい子守唄になり眠たくなってきた。だんだん瞼が重くなり思考が停止する。

苦しい、しんどい、力が出ないし体中が痛い……吐いても吐いても楽にならない、頭がクラクラする。体が燃えるように熱い、でも寒気がする……助けて、もう嫌だ辛いよ。

ベッドの上で泣きながら耐えるのは幼い俺にとってはとてもしんどく辛い事だった。熱や吐き気と闘い、頭痛で意識が朦朧とする中俺はずっと耐えてきた。薬の副作用がきついのは聞いていたけど、ここまできついとは思わなかった……治療が始まる前も辛かったけど、こんなに辛いなら治療をしない方がよかったかもしれない……そう思うこともたくさんあった。

でも、この薬を射たなきゃ病気の進行を遅らせる事はできない。進行が進み急性転化したらこれ以上の苦しみを味わいながら死んでしまふ。それは嫌だ、まだ死にたくない。

「俐桜、大丈夫？ お母さんはここにいるから。辛いだろうけど頑張る。」

母親の声がする。苦しみ、吐き続ける俺の横で手を握って座っている。

握っている手は冷たく、気持ちよかった。母さんはいつまでも握り続けてくれている。

母さんは泣き続け必死で苦しみに耐える俺をずっと“大丈夫”と言ってくれていた。

嬉しかった、苦しみが消える訳でもないのに、誰かが側に居てくれるのがとても嬉しかった。

吐き気と闘い、頭痛で狂ったように頭を枕にぶつける。辛い、痛い、しんどい、母さん助けて……声に出すことも出来ず、心の中でも叫び続けた。

静かに目を開くと、クラシックのCDが終わってしまった。体を起こし目を擦りながらCDコンボのスイッチを入れる。

窓からはオレンジ色の夕陽が部屋に射し込み目に痛いほどに眩しかった。

その時、小さく流れるクラシックに紛れて何かCDとは違う音が混じっていた。覚えるほど聞いたCDだ、違う音が入っていたら分かる。

その音はCDよりも綺麗で透き通った音だった。俺の家の周りには家はない、だから隣の家の音と言うことはあり得ない。

でも、聞こえる。目を瞑りその音に集中するとそれは誰かの歌声だと言うことが分かった。ゆっくり立ち上がり唯一の外の状況が見られる窓に歩み寄る。外を見ると肌寒い風が部屋を抜け、緑の芽を出

す桜の木の葉が揺れる。その木の根元に一人、誰かが立っていた。

桜色の季節が終わり、新芽が出始める若い桜の木が揺れる。その木の葉に紛れて揺れる黒い綺麗な髪のスラッとした少女が木の下に立っていた。

季節外れの秋の歌を歌っていた少女の声はとても透き通った綺麗な声だった。つい聞き入ってしまうほど、その声に心打たれた。夕焼けの燃えるような赤をバックに移るその影は今まで撮ってきたどんな夕焼けよりも綺麗で絵になっていた。そのチャンスを修めようとカメラを手に持ち構え、ピントを合わせる。

カメラの望遠機能でズームすると彼女の横顔が見えた。その横顔がとても楽しそうで可愛かった。歌を歌い終わると少女はそのまま何もなかった様に坂を降って行った。

少女の姿が遠くに消えていき部屋に流れるクラシックだけが俺の頭に響いていた。ボーとしていてふと気がついた。

「シャッター切るの忘れてた……」

カメラを手に持ったままゆっくりベッドに座る。シャッターを切り忘れるなんて、カメラマンになるにはまだまだだな……

でも、あの少女はなんだったんだろう、そんなことを考えながらベッドから体を半分体を落とし、うつ伏せになり目を閉じる。

頭の中に彼女の歌をもう一度流すとまた顔が熱くなり、鼓動が速くなるのが分かった。明日もいるかな……

どれくらいボーとしていたのだろうか、頭が停止している時にいきなり襖の開く音が部屋に響いた。

その音にびっくりして頭から床にダイブしてした。頭を抱え涙目になりながら痛みを耐えているとすと目の前に手が伸びてきた。

「俐桜君、大丈夫？ 見事に頭から落ちたね。」

と少し笑いながら先生が俺を立たせてくれた。

先生と言っても学校の先生ではなく、医者のことだ。この先生はまだ若いが腕は良いらしく母親が頼んで去年から俺のところに来た。

診察が終わり服を着直し大きくアクビをする。

「熱がまた上がってくるだろうから、今日はさっさと寝てよ。じゃあ俺は帰るけど、お薬忘れないように。」

先生はそう言って立ち上がり頷く俺の頭を撫でた。

俺はこの先生は好きだ。なぜなら、俺の想像する父親のように優しく、俺の頭を撫でてくれるからだ。

だから俺はこの先生になってから診察を逃げ出さなくなり、苦しい治療にも耐えてきた。

それに引き替え、本当の父親は家柄ばかり気にして俺や母親のこんなにか何にも考えていない堅物野郎だ。一人息子である俺がこんなだからひどくがっかりしていたが、正直俺にしたらざまあみろだ。

「俐桜君、どうかしたの？ さっきみたいに俐桜君がぼーとするなんて珍しい……なんか悩みがあるなら相談にのるよ。」

先生はそう言って隣に座り俺の顔を覗いた。先生なら話しても大丈夫夫と思い、恐る恐る先生に話すことにした。

「さっき、この窓の下の桜の木の下に一人女の子が歌ってたんです。その子の歌がすごく綺麗だなーと思って……」

そう言っていると顔がまたどんどん熱くなって、鼓動が速くなってくる。そんな俺を見て先生は優しく、少し寂しそうな目をして俺の頭を撫でてくれた。

「俐桜君はその子のことが気になるんだね……なら、じっとしてちゃ駄目だよ。もしかしたら明日も来るかもしれないし、その子に話しかけてみたら？」

「無理だよ！　だって知らない奴に話しかけたって……」

俺はこの家から、いやこの部屋から出られないような奴だし、話すにしても、何を話せばいいか分からない……それに俺が話しかけたりしたらあの子もきつと迷惑だ。

さっきだって、この部屋からあの子の歌を聴くだけで、何もできなかった。話しかけようとした、話したい、仲良くなりたい。でもどうしても声が出ない、話しかける勇気がない。

「俐桜君、人はいついなくなるか分からないんだ……だから一日一日後悔の無いように生きなきゃいけないんだよ。いつ愛しい人がいなくなるか誰にも分からないんだから……」

先生はそう言って悲しい笑顔を俺に向けた。医者先生は毎日生と死を前にして仕事をしているんだ、いきなり患者がいなくなる悲しさも知っている。

でも、愛しい人って？　先生に聞こうとしたその時、先生の携帯電話の着信音が部屋に鳴り響いた。

先生はにこっと笑って電話に出た。その後医療器具の入った鞆を持って大きく伸びをした。

「ごめん、病院に戻らなきゃいけなくなっちゃった。明日にでもそ

の子に話しかけるんだよ。また今度その子の話聞かせてね。」

そう言って先生は部屋を出て行ってしまった。扉が閉まる音が静かな部屋に響きわたり、また一人になってしまった。

ベッドに寝ころんでカメラの中に入っているデータを見ながら彼女の笑顔を思い出した。あの透き通った声、綺麗な黒髪。何度思い直しても可愛く綺麗な女性だった。“愛しい人”。先生が言ったあの言葉が耳に残った。愛しい人ってなんだろう、どんな人の事を言うんだろう。

そんな事を思いながらデータを見ていたら部屋の襖が開き母親が入ってきた。その音に少しびっくりして母親の方に顔を向けた。

「あら、どうしたの？ そんな驚いて……」

今日はいろんなことにびっくりして、普段なら驚かない襖の音にも驚いてしまった。今日はどうかしている。

“別に”と言ってカメラをベッドに置き体を起こす。ベッドにもたれ掛かりゆっくり息を吐き出し心を落ち着かせる。母親は俺の横に座り俺の手を握り小さくため息をついた。

俺の手を握っている母親の小さく細い手は小刻みに震えていた。顔を覗くと母親の目は定まらず何かに怯えるようだった。

「あのね俐桜、さっき先生と話したの。そしたらね、進行が進んでるから、少し薬の量を増やすって……でも、そうしたらまた俐桜が苦しんでしまう……私はこれ以上もう、苦しむあなたを見ていられないの……」

そう言うとう肩を震わせて静かに声を殺して泣いていた。

握られた手の震えがこちにまで伝わって来た。握られた手を握り返し、母さんの小さな背中にもたれ掛かって頬を背中につけると母

さんの匂いがした。小さい頃、よくこうやって甘えた時に嗅いだ匂いだ。中学になってからどうも母親とは距離を置きがちだったから、こうやって甘えるのは久しぶりだ。

「大丈夫だよ母さん。俺は耐えるよ、絶対治るって母さん言ってくれたじゃん。心配してくれてありがとう。」

そう言って静かに目を閉じ、現実を見つめ直す。

副作用の苦しみには慣れたとはいえ、これ以上薬の量が増えたら精神状態を維持できる自信がない。今の量で肉体的にも限界に近い。しかし、進行が進んでいるのは事実、薬に頼らなければ俺は生きていけない。薬もそう安いものではないし、母親にも迷惑がかかる。夜中に苦しむ俺をいつも横で支えてくれ、看病してくれる母親の体力もギリギリだ。

「無理しなくていいのよ、辛かったら辛いって言ってね。あなた自分からは何も言わないからお母さん心配で……でも、俐桜が頑張るって言うんなら私も頑張るわ。」

母親は俺の方を向き微笑みかけそう言って、静かに立ち上がった。俺が苦しくっても何も言わないのはあんたが心配性だからだよ。それに、俺が泣き言言ってたってこの病気が治るわけでもないし……

「そろそろ夕御飯の用意してくるわね。」

そう言うと母親は早々と部屋から出て行った。カメラを手にして夕日が沈む山をフィルムに焼き付けた。

雲が揺れ動く中カメラを空に向けると綺麗な青空が映った。あの子は今日も来て歌ってくれるだろうか。

そう思いながらクラシックを聴く。その時、窓の外から聞こえた声は昨日のあの子の声だった。

（来た、今日こそ話しかける……）

窓に向かいゆっくりと歩くと昨日と同じ桜の下にあの少女が立っていた。昨日と同じく季節外れの歌を歌いながら楽しそうに歌っている。

歌を聞いていると、楽しそうに歌っているのになぜか悲しそうな歌声だった。

どうしてこんな悲しい歌声で歌っているんだ？ 昨日はこんな事感じなかったのに……

「おっ！ おい……」

少女に向かって大きな声でそう言うと少女は俺の方に振り返り、少し顔を赤く染めて走り去ろうとした。

「あっ、待てよ！ 話がしたいんだ……」

俺がそう言うと少女はゆっくり俺を見て首を傾げた。やっぱり迷惑だったかな……

「怒らないの？ 私の歌、五月蠅いって……」

少女は俺と話をしてくれるらしく、ゆっくり俺の家の塀によじ登り少し近づいた。これじゃロミオとジュリエットの逆バージョンにな

ってしまう……まあ今はそんなことどうでもいいか。

「怒らないよ。だから、少し聞いても良い？　なんでこんな所で歌ってるの？」

少女は怒らないと聞いたら、満面の笑みを浮かべ一度大きく頷いた。塀に座って、足を交互にバタバタさせながら話し出した。

「私、最近こっちの祖母の家に越してきたの。前までは都会だったから歌を歌ってたら五月蠅いって言われて……で、こっちだったら田舎だし、大丈夫かなって思ったら祖母が五月蠅いって言うの。それで、外で歌おうという場所を探したらここは人通りも少なくないかなって……ごめんね、五月蠅かったら場所移動するから……」

少女はそう言って塀に座って足を交互に揺らしながらゆっくり悲しげな顔で微笑んだ。

「そんなことない！　俺は、五月蠅いなんか思っていないよ。寧ろ、つまらないクラシックよりお前の歌の方が面白いよ。」

窓から身を乗り出してそう言うと、彼女は少し驚いてから大きな声で笑い出した。そんな彼女を見ながら何故笑われているのか、自分が言った言葉を思い返してみた。

「ごめんなさいね、あまりにも必死に言うから……でも、ありがとう。また明日も来ていいかしら。」

少女は首を傾げながら俺に問う。お礼を言われ、明日の約束をする。昔に戻ったみたいだ。なんだか、とても嬉しい。

「ああ、いいよ。でも、もうすぐ夏なんだから夏らしい歌を歌つてよ。」

俺のリクエストを聞いてはにかみながら頷くと、塀から飛び降りて昨日と同じく、何事も無かったかのように坂を降っていく。彼女の姿を見ながら大切な事を聞き忘れていたことに気がつき大声で叫ぶ。

「ねえ！ 俺は俐桜っていうんだ！ お前の名前聞いてない！」

久々に出した大声はとても気持ちよかった。彼女は俺の声に気がつき、こつちを振り返りながら口元に手をそえ、

「私の名前は、一輪いちりんよーバイバイ、俐桜君！」

そう言って一輪は大きく手を振ってからまた坂を下って行った。

第一楽章（後書き）

ダメダメな文章を読んいただきありがとうございます！第二部もお楽しみに！

第二楽章（前書き）

俐桜くんも、小さい頃はまだ可愛かった・・・
それが今は生意気に・・・

第二楽章

「お母さん、人っていつ死ぬと思う？」

そう、まだ幼い俐桜が入院中にベッドの上から聞いてきた。

病気が発覚して一ヶ月あまり。この1ヶ月、副作用のせいで辛い思いをした俐桜の目には光が入らなくなってしまった。そんな目をしてながら無表情のまま私の手を握り聞いてきた。

そんなこと聞かれても分からないし、今は死については話したくない……

「分からないわ、考えたことなかったもの……」

少し困ったような表情を浮かべながらとりあえずそう言う。俐桜はもう一度私の目を見て少し微笑んで、

「感情が無くなった時なんだよ。泣きたい時は泣いて、怒りたいときに怒って、笑いたい時は笑う。そんな当たり前の事ができなくなつた時、人は死んじゃうんだって。」

俐桜はそう言っただけで少し微笑んだ。

そして、チューブの繋がった小さな手で私の手をゆっくり包んだ。

「ほら、僕まだ笑えるよ。どんなに辛くても、しんどくても笑えるよ。だから、僕はまだ死なないんだ。」

俐桜の手はとっても暖かかった。お日様に照らされたみたいに暖かくては気持ちが良い。

そんな俐桜の手と言葉に涙が出てきそうになった。

「でも、どんなに笑ってても僕のこの手が冷たくなったら、駄目なんだ。ねえ僕の手、まだ暖かいでしょ……僕、まだ生きてるんだよ。まだ……僕、生きていたいよ……ずっと、ずっと笑っていたいよお、死にたくないよ！」

そう言って俐桜は大粒の涙を流しながら私の手を強く握った。

大きな声を出して泣き続ける俐桜をゆっくり抱きしめるがすぐはね飛ばされてしまう。

辛い闘病生活の中で鬱になる人が多いと聞いていたが、俐桜がこんなになるとは思わなかった……

情緒不安定になってしまった俐桜は何度も自分の足を殴っては泣き、じっとしていたと思うと急に笑い始めたりした。

前までこんなじゃなかったのに……私が話しかけても反応が無かったり、逆にいきなりキレたりして、私もどう接したらいいかわからなくなった。

でも、クリスマスプレゼントにカメラを買ってあげた、その日から俐桜は窓の景色をカメラに収めたり、なんと自分から病院を歩いて写真を撮ったりしだした。

俐桜は昔からカメラが大好きで、撮るのも撮られるのも好きだった。写真を撮っている時の俐桜はニコニコ笑って、病気になる前の俐桜に戻ったみたいで私も嬉しかった。

まだ、この子の心は死んでない。だから、俐桜はまだ死なない。

「ん……さん……母さん……？」

目を覚ますと目の前には俐桜がいた。辺りを見渡すとリビングで寝てしまったみたいだ。

私が目を覚ましたのを見た俐桜はミネラルウォーターを飲み干した。

「おはよう、もう父さん帰ってくる時間だよ。」

寝間着姿の俐桜は空になったミネラルウォーターをゴミ箱に投げ入れて私の前の椅子に座った。

中学二年生になった俐桜は成長期を迎え、私より背が高くなり顔も少し大人びた。

しかし、中身はまだ小学生だ。この五年、家と病院の間を行き来しているだけで全く外には出ていないのだ。少し常識知らずの所はそこから来ているのかもしれない。

「明後日から2、3日入院して新しい薬使うつて、さっき先生から電話あった。用意お願いしてもいい？」

少しは腫れた目で私を見てきた。きっとその電話を聞いてから泣いたのだろう……そりゃ一番辛いのは俐桜本人なのだ。

明後日から入院、新しい薬は少しでも俐桜を楽にしてくれるのかしら……

もう、辛い顔をする俐桜は見たくない。小さい頃よりは情緒は安定してきたけれど、やっぱり時々不安定になるときがある。そんな時、どうすればいいか未だに分からない……親なのに、こんなに長い時間一緒にいるのに、手を握って頑張つてと言うことしかできない……その時、俐桜の腹部から“ぐううう”腹の虫が空腹の合図を鳴らした。俐桜は少し顔を赤らめながら笑った。

「晩ご飯の用意しようか。俐桜は自分でできるだけの入院の用意し

てきなさい。お父さんが帰ってきたらご飯食べよう。」

椅子から立ち上がり冷蔵庫から食材を取り出し晩ご飯の用意をし始める。俐桜は言われたとおり自分の部屋に戻っていった。

「明日からだっけ？ 入院するのいつ帰ってくるの？」

一輪はフルートの頭部を綺麗に掃除しながら俺に聞いてきた。俺もカメラを覗いたまま夕日を映し出す。シャッターを切るか切らないかを悩んだ結果、カメラを手元に下げる。

「2、3日かな〜でも、俺の体調次第だから分からない。」

一輪と会ったその日から毎日のようにこの窓から一輪を待っている。始めは来てくれないと思っていたけど、一輪は毎日わざわざ家に帰ってからも楽器を持って会いに来てくれる。

そんな一輪が俺にとってとても嬉しかった。俺にも音楽とカメラ以外に毎日の楽しみが出来た、俺という楽しいと言ってくれる人が俺にもいる。

「体調って……そんなに辛いのか？ その薬になったら楽になるんじゃないの？」

一輪は驚いたような表情をして俺を見た。

一輪はフルートの頭部を他のパーツに合体させ音だしをしだした。その音は一輪の声と同様とても綺麗な音をしていた。

「分からない。でも、薬に楽なんて物は無いよ……とりあえず頑張ってみるけど、2、3日で帰れるか分からないし、帰れたとしても会えるか分からない……」

帰ってきたとしても歩けるような状態になるまでどれくらいかかるか分からないし、起きれるかも分からない。ああもう行く前から気分悪くなってきた……

「そおか……じゃあ私が病院にお見舞いに行つてあげようか！ 入院中退屈でしょ？」

「えっ！ いい、いいよ！ 母親もいるし、たぶん入院中は俺面会出来ないから……」

それに、入院中の寝た姿一輪には見られたくない……苦しむ姿を見られたくないのもそうだし、母親に一輪存在がばれたらいろいろと五月蠅い……

面会出来ないのも本当だ、先生と両親だけが面会出来るようになっている。

「ええーじゃあ病院の庭からフルート吹いてあげる！ 毎日これくらいの時間に吹いてるからそれなら寝たままでも大丈夫でしょ？ でも、迷惑掛けないように10分ぐらいで帰るね……」

一輪はそう言ってニコニコ笑った。

そして、メヌエットをフルートで独奏し始めた。それを聴きながらゆっくり目を閉じる。

何を考える訳でもなく、ずっとその綺麗で透き通ったフルートの音を聞いている。そんな時間が俺はとっても好きだ。

しかし、聞いている途中、いつもこの場所で音が半音下がった事に

気が付いた。

「そこ、そのファの音（フラット）になってる。いつもそこ間違えるんだからさあ、ちょっとは気をつけなよ。」

「俐桜くん厳しい〜っていうか楽器もやってないでよく分かるね？絶対音感ってすごいよね〜」

一輪はそう言って持ってきていた楽譜にさっき注意したことを書き込む。

そりゃ、毎日飽きるほどいろんなクラシックを聴いてきたんだ、嫌でも覚えるっつーの……確かに生まれつき絶対音感を持ってるけど……

「楽器、やってたよ……」

「えっ！ 本当！？ 何の楽器？ 一緒にやろうよ！」

一輪は驚いた顔をして身を乗り出して俺に聞いてきた。確かに、やってた事はやってたけど……

病気が発覚してからやってないし、今はうまく弾けるか分からない……だから、一輪には言わなかった。自信もないし、言ったら今みたいに弾いてって言われるのは分かってたから……

「ヴァイオリンだけど……今うまく弾けるか分からないし、それに……」

「そんなの良いから、今すぐ持ってくるの！ ほら、速く速く〜」

一輪の勢いに負けて部屋の押し入れを開ける。最近開けてなかった

から埃が舞ってくしゃみが出た。段ボールと段ボールの間に挟まったヴァイオリンケースを出したケースを開くと意外に綺麗だった。弦もしっかりしてるし、弓も綺麗だ。

ヴァイオリンを持って窓際に行くと一輪は楽譜を投げてきた。慌てて受け取るとそれはカノンの楽譜だった。カノンは昔弾いたことがある曲だ。途中でテンポが速くなり難しくなる。

一輪を見ると“弾いてよ”と言う風な顔をしてフルートを吹き始めた。あまり速い曲は得意じゃないんだけどな……

まずはゆっくりとしたテンポで二人で弾く。一輪が上で俺が下のパート、良い感じにハモって思った以上に綺麗だ。速いテンポも思いの外うまくいった。

その時、急にフルートの音が消えた。少しびっくりして目を開けるとニコニコしながら俺の音を聞いていた。

俺のヴァイオリンのソロ、テンポ良くでもなめらかに曲を進める。

次は一輪のフルートのソロ、静かに流れるように吹いていく。

そしてまた二人でハモる、お互いソロをしてから音が響くようになり、そのまま曲は終わった。

「俐桜くん、とっても上手！ ヴァイオリンってそんな綺麗な音出たんだ！ なんだかとても楽しいね！」

とても楽しそうな一輪のその笑顔を見たら急に顔が熱くなった。

自分でも顔が赤くなるのが分かって恥ずかしくなり一輪から顔を背ける。

なんか夕日のせいか一輪の笑顔がキラキラ輝いて見えた。何でこんなに一輪の笑顔を見ると顔が熱くなっちゃうんだ……

陽の光が窓から射し込んで眩しかった。朝早くに家を出て病院に直

行。病院に着いたらすぐに体調が万全か検査をする。検査が終わる次第すぐに薬を投与する。

薬を投与して約30分、そろそろ薬が効いてくる頃だ。もう寝ちゃった方が良くないかもしれない……

寝たら起きてるときよりは苦しみを感じなくてもいい。でも起きてなきゃ、起きてなきゃ……

急に吐き気が襲ってきて、隣に置いてあった容器に戻ってしまった。自然に涙が出てきた。

苦しい、もう慣れたはずなのに……辛いことにもしんどい事にも慣れたのに、涙が出てきた……

体中に鈍い痛みが走り、筋肉がバラバラになったみたいに痛みが走った。痛みと吐き気で体の中がもうもうぐちゃぐちゃだ……

そんな時、窓の外からフルートの音が病室に響き渡った。いつも部屋から聞いていた綺麗なフルートの音色、いつものところでりになる……一輪だ、一輪のフルートだ……

綺麗な音色と透き通った音、そんな音色が心地良くて辛い事も忘れちゃいそうだ。

しかし、そんな中でもやっぱり吐き気は消えてはくれる訳もなく、ベッド横の容器に戻ってしまった。

そして約10分、曲が終えた後もうフルートの音色は聞こえなくなってしまった。

どこに行っちゃったの？ 俺を、俺を一人にするの……俺を一人にしないで！

涙で曇って前が見えない、体の痛みでも吐き気でもない何かが痛い……心に大きな穴が開いてしまったみたいに寂しくて苦しい……

誰か俺の近くにいてよ、俺に歌を聴かせて、俺に必要としてよ……いきなり胸が苦しくなり吐くものも無いのに戻す。このまま心臓が

潰れてしまうのかと思うぐらい苦しく、息が出来なくなり手で胸を抑える。そんな時、手に何か冷たい物が手に触れた。

「俐桜！？ 大丈夫！ 今先生呼びするから、それまで頑張ってる！」

かあ……さ……ん？ 冷たい手、細長い指、ひやひやしていて気持ちいな……

一輪の手も、こんな感じなのかな？ 一輪と、窓からじゃなくて正面から会って話したい、たくさん話して、また一緒に楽器を演奏したいなあ……そう思いながらも瞼が静かに降りていく。

次に目が覚めた時、病室が変わっていた。俺は酸素マスクをして広くて機械がたくさん置いてある部屋に寝かされていた。

窓からの日はもう西に傾いていた。あれから一日も経ってしまったみたいだ。

窓を見ようと顔を横に向けると首が痛痒かった。チューブが繋がった手で触れてみると包帯が巻いてあり、その触れた手にも包帯が巻いてあった。なんで包帯なんか……

そんな時、病室の扉が開き看護師さんが入ってき、目を覚ました俺を見て直ぐに先生を呼びに行った。

看護師さんを入れ違いに母さんが病室に入ってきた。母さんは俺を見て泣きながら近づいてきた。

何で、何で母さんが泣くの？

「良かった、本当に良かった……あの後、あなた意識を無くして一

回呼吸が停止したのよ！ 苦し紛れに首は引っ掻くし、発疹は出てくるし……本当に心配したんだから……」

俺、そんな事したのか？ じゃあこの包帯は俺が引っ掻いたのか？ 数分して先生が慌てて入ってきた。先生は酸素マスクを外し、俺の心拍数や瞳孔を確認してゆっくり息をはいた。

「もう、大丈夫だ。よく頑張ったな。やはりこの薬はまだ俐桜君には強すぎたみたいだ。回復し次第もとの薬に戻そう。退院はそれからだな。」

先生は俺の頭を撫でながら静かに微笑んだ。そんな強い薬を使わなきゃいけないほど病気が進行しているのか……

ちよつとショックを受けていると、撫でている先生の腕時計が目に入った。

見ると一輪が来る時間の約20分前だった。俺は弱々しい手で先生の腕を掴んで必死に頼む。

「先生、ここどこ？ 俺を元の部屋に戻して！ お願い！ 元の――」

頼んでいる途中で息が出来なくなり力尽きる。呼吸困難になり、ベッドに崩れ落ちる俺を先生は支えてくれ、素早く酸素マスクを俺に着けてくれた。

「おねが……いお……れを……もと……のびよう……しつに……」

目に涙が溜まり先生が歪んで見える中、うわごとの様に言い続ける。速くしないと一輪が来てしまう。

今の俺にとって、唯一の楽しみは一輪の歌だけなんだ……速く行か

なきや……

そう思いながらも体が動いてくれない、息もしているのに、しているように感じない。

そんなぐったりした俺を先生はゆっくりベットに寝かせ母親と看護師を連れて病室を出て行ってしまった。

待ってよ、俺を元の部屋に戻してよ！ 一輪が来るんだ！ 行かないや駄目なんだ！

声に出したいのに、叫びたいのに声にならない自分が嫌になった。

歩くことは疎か、自分の力で体を持ち上げることすら出来ない。そんな自分が情けなくて涙が出てきた。

もう、約束の時間になってしまった……今さらもう移動は出来ない。もう、間に合わない……

そんな時、窓の外からいつも聴いていたフルートの音色が病室に響き渡った。

この音、一輪？ でも、なんで……？ 疑問に思いながらも一輪の綺麗な演奏をベットの上で聞く。

今日はG線上のアリアだ。穏やかで優雅な美しさを思わせるメロデュー。

ヴァイオリンが主となるこの曲をフルート一つで弾くととても悲しげな曲になってしまう。

俺が、俺のヴァイオリンが入ればきっと綺麗になる。

でも、俺は入れない。速く入れるようになれと言ってるのか？ いやあ、応えなきや。

約10分、昨日と同じように曲が終わると一輪はさっさと去っていった。

でも、今日は辛い、悲しくない。目標が出来た、速く帰って一緒に演奏しよう。

そう言いたいんだよな、一輪。

目を閉じてゆっくり呼吸を繰り返す。

数分して先生が戻ってきた。母親はいつもこの時間はどこかに行ってしまうから、いない。

先生は俺の横に座り、俺の頭を撫でながら微笑んだ。

「あの女の子にこの部屋の場所教えといたから。明日からもここに来るって。」

先生が一輪にこの部屋の事を言ってくれたんだ。先生は一輪の事知ってたんだ。

でも、羨ましい……正面から会って話すことが出来るんだ、俺も一輪と話したい。

いつも俺たちは窓越しでしか話せない。俺が外に出れば良いのだが、出れない……

近くに行きたい、一輪の隣で一緒に話したい。そんな、望みのない願望だけが大きく膨らんでいく。

「一輪……他に何か言って……ましたか？」

酸素マスクの上からだから上手く話せなかったが、先生には伝わったようだ。

「あの子一輪ちゃんって言うんだ。その一輪ちゃんからの伝言だよ。」

先生はそう言って俺に一枚の小さなメモを手渡してくれた。包帯だらけで動かしにくい手でそのメモを受け取る。

『俐桜君へ。病室が嫌で移動したんだって？ わがままさんだねえ』

「先生に迷惑かけちゃだめだよ！」

今日のG線上のアリア、やっぱりフルートだけじゃ物足りないね。ヴァイオリンが入ってくれないと曲が盛り上がらないよ。楽譜を先生に渡しておくからちゃんと覚えてきてね！ 帰ってきたときにまた一緒に弾けるように予習しといてよ！ じゃあ、また明日も来ます。一輪より。』

丸っこくて少し小さめで可愛い文字、一輪らしい文章、一輪らしい文字。メモを体の上に乗せ、ゆっくり息を吐く。メモを読むために首を立てていたため息苦しかった。

でも、この病室が嫌で移動って、なんだ？

「一輪ちゃんにはきつと心配するだろうから、様態が悪くなったって言わなかったよ。だから、適当な嘘ついちゃった。ごめんね。」

適当って、適当にもほどがあるよ……これじゃあ俺がわがまま小僧みたいじゃん！

まあ確かに俺はわがままなところはあるけど……これって先生の皮肉？

でも、正直助かった。一輪のことだからきつとしつこく攻めてくる

……先生、ありがとう。

先生は俺の横の棚に楽譜を置いて病室から出て行った。

第二楽章（後書き）

またしても中途半端な終わり方に・・・
第三楽章もご期待を・・・

第三楽章

初めはただの風邪だと思ってた。ぐったりとベッドで寝ていると思うと昼間は微熱が続いて、夜には四十度まで上がる。

顔色が悪いが、数日すると熱が下がり少し元気になり学校にも行けた。

しかし、また少しすると熱がでるといふことの繰り返しだった。

しかし何日かした時から、少しづつただけで内出血をし、体中が痣だらけになってしまった。

さすがにおかしいと思い俐桜を病院に連れて行っただが、風邪としか言われず解熱剤をもらうだけで原因も病名も分からないまま帰宅した。

熱が下がらないままぐったりとした俐桜を治してやりたいと思うのだが、解熱剤を投入しても下がらない。小さい個人病院では駄目だと思い、総合病院に行つて血液検査をしてもらうことにした。

小児科は風邪が流行っているのか、とても混んでおり、結果が出るのに結構の時間を待たされた。

検査の結果が出ると何故か直ぐに骨髓検査に行くように言われた。骨髓検査をするのに俐桜だけ処置室に運ばれた。

処置室には親は入れないので待合室で待つことしかできなかった。滅多に泣くことがない俐桜が泣き叫ぶ声が待合室に響く。そんな声を聞いていると速く俐桜を解放してあげてほしいと思った。

それからどれくらいたったか分からないが処置室の扉が開き、俐桜がベッドに横たわって運ばれてきた。俐桜はまだ麻酔が効いているためか、目は開いているのに呼びかけても反応が無かった。横たわる俐桜の手を握ると弱々しい小さな手で私の手を握り替えしてくれ

た。

その日、診察結果を先生に言われた。

「俐桜君は慢性骨髓性白血病まんせいこつずいせいはいけつびょうです。子どもには稀な病気です、治療が必要なので入院してもらいます。」

ハッケツビヨウ……そんな……俐桜が白血病なんて。

頭の中が真っ白になった。私の息子が白血病なんてあるわけがない……そんなことあるわけがない……

目の前のベッドで静かに寝息をたてる俐桜を見ながらあの日の事を思い出していた。

初めて先生にそう言われたときこの世が終わったと思った。

俐桜が白血病な訳がないと何度も頭の中で唱えたが目の前に横たわっていた俐桜を見ると現実だと思い知らされた。

今日みたいに、俐桜の病状が悪化したら怖いため今日は先生に頼んで泊まり込みで俐桜の看病をする事にした。

俐桜の目にかかった前髪を直して横に設置してある簡易ベッドに横たわる。明日にはきつと良くなってるわよね……

「俐桜！ 何やってるの！？」

病院に帰ってきた時、俐桜は病院のロビーにいた。点滴を引きずりながらロビーのベンチに座っていた。

「あつ、母さん。お帰り。暇つぶしに散歩してたんだけど、疲れたから休憩中〜」

包帯で覆われた手を振って私を出迎えてくれた。

こう見ると俐桜がとても小さく見える。昨日掻きむしった首、発疹で荒れた手には包帯が痛々しく巻かれており、顔色は死人のように悪い。服の間から見える肌は白く、そしてとても細かった。

小さい頃はスポーツが大好きで結構筋肉質だったのに、今では歩くことすら大変。

「暇かもしれないけどまだ病室にいなきゃ駄目でしょ！ ほら、早く戻るわよ、歩ける？」

俐桜の手を取りながら尋ねると俐桜は微笑みかけながら頷いた。立ち上がり病室まで二人でゆっくり廊下を歩く。昨日呼吸が止まったというのに歩き回っちゃ駄目なのに、ここらへんはまだ子供。

病室に戻り俐桜をベッドに入れる。俐桜はベッドに入るのを渋りながら、渋々ベッドに入る。

横の椅子に座り今日買ってきた俐桜が好きな黄金糖を俐桜に差し出す。

「母さん、ごめんな。今日退院するはずだったのに延期させちゃって。」

俐桜は黄金糖を舐めながらふとそんな事を呟いた。俐桜を見ると少し悲しい顔をしていた。

謝らないで……俐桜が謝る必要なんかない。一番しんどいのは俐桜自身なんだから……

「何謝ってるのよ。謝るんだったら勝手に散歩したりしないでちょうだい。さっき先生と話して、落ち着き次第退院できるらしいわよ。早くて明後日には退院できるって。よかったわね」

俐桜の手を取りながら言う、泣かないように無理矢理の笑顔を作る。俐桜は私の話を聞いて小さく微笑んで“寝るな”と言ってベッドに入り私に背中を向けて寝てしまった。

俐桜は私の笑顔が無理矢理なのを分かっている。ごめんね、ちゃんと笑えなくて……私は俐桜に気付かれないように静かに涙を零した。

「うん、明日には退院出来るだろうね。でも、無理はしちゃ駄目だ。一輪ちゃんに報告しなきゃだな。」

診察が終わり先生はそう言ってカルテに何かを書き込む。俺は前のボタンを止めながら静かに頷く。

結局今回の薬も駄目だった……いつになったら俺の病気は治るんだろう。

いつになったらみんなと同じような生活出来るんだろうか……

時々俺はこのまま死んでいくのだろうか、などと考えてしまう。考えてどうなることでもないし、そんなことを口にしたらまた母親が泣くから言わない。

「先生……俺いつになったら治るの？　っていうか、治るのかな……」

ボタンを全て止め終わり、小さな声で聞いてみる。先生は小さなため息についてカルテを棚に置き、傾いてた体を正面にむき直した。

「俐桜君、そんなマイナスの考えを持ちちゃ駄目だ。どんなに辛く、しんどいことがあっても生きてさえいればきっと輝く未来が待っているんだから。生きてさえいれば……」

先生は悲しそうな顔をしながらそう言うと、俺の頭を優しく撫でた。生きてさえいれば……つまり、死ぬまで輝く未来があるってこと？ 輝く未来って、そんなものあるのだろうか……

「なんてね。これ、受け売りなんだ。でも、どんな事があっても生きなきゃ駄目だよ。」

先生は俺の頬を軽く摘まんでからカルテを持って椅子から立ち上がり、廊下から呼ぶ看護婦さんに返事をして病室から出て行った。

先生と入れ替わりで母親が入ってきた。父親は何度入院しても、見舞いには来ない。そんな父親の世話にならなきゃ生きていけない自分がイラつく。

「もう大丈夫ね、明日の退院まで動いちゃ駄目よ。明日のお昼頃に車を止めておくからそれまでに用意しといてね。」

母親はそう言って病室から出て行った。だいたいいつもこれくらいの時間になると母親はどこかに行ってしまう。

「りーおーうーくーん！　こんにちはー」

そして、母親がいなくなったぐらいの時間に一輪は来る。ベッドから立ち上がり窓から下を覗くとスカートに薄い青色のパーカー姿の一輪が立っていた。ニコニコと笑う一輪に俺も少しだけ微笑みかける。膝より少し上のスカートを翻しながら一輪はフルートを箱から取り出した。

「今日ね、遠回りしてここにきたらね山道に小さな神社があったの！ 本当に小さいんだけどね、結構落ち着くんだよね。」

そういえば、一輪は俺の前で学校の話をしてない……制服でも来ない。いつもほんの些細な事でも楽しげに話してくれる。俺にとってそれはとても面白くて、楽しかった。一輪は俺に気を使ってるのか、学校のことを話さないのは、一輪が学校を嫌いなのかはわからないが俺には学校の話よりそういうほんの些細な話の方が嬉しい。

学校に行きたいなんて思っていない。今更行っちゃって友人もないし、勉強にもついていけない気がしない。ニートと呼ばれたくないし、負け組みに入りたくないから病気が治ったら学校に行く。でも、それもおそらく高校までだろう。大学には行かず働くだろう。

「へえ、俺ずっとここに住んでるけど、その神社は知らないなあ。また病気が治ったら行きたい所が増えた。」

一輪は学校が好きなんだろうか……学校に行ってて面白いのかな？ 好きで行ってるのか、義務だから行ってるのか……

「俐桜君、いつ退院出来るの？」

「このまま俺が何もしなければ明日にも退院出来るよ。心配かけてごめんな。」

本当に心配してくれていたの？ と頭のどこかで誰かが尋ねてきた。少し不安になったが、一輪を信じよう。

「本当！ 良かった。心配したんだからねえ。これでまたたくさん話せるね！」

一輪は手を合わせて喜んでくれた。ほら、一輪は心配していてくれた。俺も家に帰ったら父親がいるから帰りたくなかったが、一輪と話せると思うと少し帰りたくなった。

「俐桜君、退院おめでとう。家でも、今まで通り薬飲んでね。ちょっと副作用はきつくなっちゃうけど、頑張ってね。寄り道しないで帰るんだよ」

先生に薬を渡され頷いて病院を出る。

病院の外のタクシーで家まで帰る。今日は母さんは用事があるらしく、1人で帰ることになった。1人で外が出るのは久しぶりだ。タクシーに乗り込み運転手に行き先を伝える。走り出して流れる風景を眺める。そんな風景をボーと眺めていると、でかい建物が見えてきた。

学校だ。

俺が通うはずだった学校、一輪が通っている学校、みんなの笑顔が溢れる学校……

制服を着た生徒が楽しげに話しながら帰宅していく、グラウンドの部活の声。

俺が見たこと無い世界がここにあった。

「すみません、ここで下ろしてください……」

なぜか口が勝手にそう言って、勝手にお金を払ってタクシーから下りていた。下りた後で少し後悔した。

ここに俺の居場所はない。俺の存在を知っている奴なんかいない。どうして下りてしまったんだろう……

歩いて帰れない距離でもないし、帰ろう。もう一度タクシーを探しても良いが、なんとなく歩いて帰りたい気分だ。

ゆっくりとした足取りで歩道を歩いていると、後ろから声をかけられたら。

「おい、俐桜か？」

第三楽章（後書き）

『病は気から』

だそうです・・・

気をしっかり持って、治るという希望を持ちましょう！

第四章

「おい、俐桜か？」

名前を呼ばれたから振り向いてみると、スポーツバックを肩にかけた色黒の青年が一人立っていた。その後ろには数人の青年が不思議そうに俺を眺めていた。

なんで俺の名前を知ってるんだ？

「やっぱり、俐桜だ！　もう病氣治ったのか！？」

こいつ、誰だっけ：

病氣のことを知ってるということは、俺の知り合いっていうことなんだけど：

「あれ？　俺のこと忘れてる？　まあ、最後に会ってから何年も経ってるし、俺もこんなイケメンになればなあ〜分かんないのも分かるぜ〜」

後ろの仲間と思われる数人の奴らが“誰がイケメンだよ！”と笑いながら突っ込んで笑っていた。

この少し自信家な奴……思い出した！

「うぐいす鶯？」

「おっ、覚えててくれたか！　そう、鶯様だよおくん！」

小学校に入った時、桜と鶯で春の綺麗な物ということ、勝手に話し

かけてきたのがきっかけだった。しかし、こいつの明るい性格と俺の静かな性格が意外に合っていたのか、仲良くなった。

あれから何年も経って、同じぐらいの身長だったのに鶯の方が頭一つ分ぐらい高くなってしまっている。周りの奴らも俺なんかより高いし……

「鶯、こいつがお前が話してた俐桜？ うわっ、女みてえだな」

「ちっちゃなあゝ肌も白いし、睫毛長いし、本当に女みたいだな」

周りの仲間が俺をまじまじと見ながら笑った。上から見下ろされるのは嫌いだ。

ましてや、女って……少しムツとすると周りの仲間は俺の頭を撫でた。完全子供扱いだ。

でも、鶯が俺の事話してくれてたっと言うのは少し嬉しかった。

「ところで、なんで学校来ないんだ？ お前の席、ちゃんとあるんだぜ」

鶯はそう言って首を傾げた。

まだ、俺の席残ってるんだ……びっくりした。

少し見上げる形で、鶯を見る。こいつなら、話していいかな……

「まだ、治ってないんだ……」

「はあ？……大丈夫なのか？ 俺達に出来ることあるなら何でも言えよ、協力するから！」

鶯の言葉は暖かくて、優しかった。心に空いていた穴が少し埋まった気がした。

なぜか自然に涙が出てきた。

「って、おい！　なんで泣くんだよ！」

鶯は慌てながら俺の顔を覗いてきた。

俺も何で泣いてるのか分からなかった。何故か涙が止まらなかった。

「治るか分からないんだ……速く、治りたいのに……悪くなる一方なんだ……もう、どうすればいいか……分からないんだ……」

袖で涙を拭いながら、心にあった不安を吐き出した。

治ると信じて治療してきたのに、どんどん病状は悪くなる。このまま治らないで、死んでしまうのではないかと何度も思った。こんなこと、鶯たちに言っても何にもならないのは知ってるのに、涙が止まらなかった。

その時、ふと頭が暖かくなった。

「俐桜……お前は頑張ってるよ。だから、大丈夫だ！　治るさ、絶対治る！」

鶯はそう言って俺の頭を優しく撫でてくれた。壊れ物を扱うように優しく、ゆっくり撫でてくれた。優しくされたら余計に涙が溢れ出した。

「こんな小さな体で闘ってんだろ？　すげえよ！」

「今の医学は進んでるんだ！　大丈夫だって！」

「病は気から！　楽しいこと考えようぜ！」

鶯の友達も集まってきてそう言ってくれた。

慰めてがこんなに暖かいなんて思ってた。今まで慰めなんかただの上辺だけの言葉だと思っていた。ムカつくだけ、と思っていた。でも、こんな少しの言葉だけど暖かくなるなんて……泣き続けて、少し落ち着いてきた。

「うう……ごめん。急に泣いたりして……」

「良いって事よ。それよりなんでこんな所にいるんだ？ 寝てなくて良いのか？」

鶯は俺の涙を拭いながら聞いてきた。病院の帰りに寄り道、なんて言えない……どうしよう。

「俐桜君!？」

聞き覚えのある声が鶯の後ろから聞こえてきた。いつも聞いていた声、会いたかった人の声だ。

「一輪、なんで……」

鶯たちの後ろをゆっくり見ると制服姿の一輪が驚いた顔をして立っていた。

「なんでって聞きたいのはこっちよ!？ 今日退院なのは聞いたけど、こんな所に来るなんて聞いてないわよ!」

一輪は少し怒った表情を浮かべながらこっちに一步步近づいてくる。俺は一輪が近づく度に少しずつ退く。やっぱりまずかったかな……

「いや、外の空気が吸いたくて……タクシーを下りて、少し散歩を……」

一輪は俺の目の前まで来てムツとした。

「駄目じゃない、大人しくしてなきゃ……また、体壊しちゃうよ。
ん？ 鶯君、俐桜君と友達なの？」

一輪は乱れた俺の前髪を直してから鶯に話しかけた。鶯たちは少し驚きながら頷いた。

「俐桜とは小学生の時からのだちだ。それより、なんで俐桜は城崎を知ってるんだ？」

まずい、一輪と知り合いだった事を言うのはなんか気が引ける……
どうしよう。

そう思っていた矢先、腕を引っ張られた。一輪が顔を真っ赤にして
早足で俺を引っ張っていたのだ。

「鶯、今日はありがとう。なんかすっきりした。またいつでも遊び
に来いよ。母さん喜ぶから。じゃあな。」

鶯に微笑みかけてから手を振って一輪と家へ帰る。初めは早足だった一輪も、ゆっくりの俺の歩調にあわせてくれた。

畑の間の道、俺の少し前を歩きながら一輪は鼻歌を歌っていた。長い黒髪を揺らしながらご機嫌だ。鼻歌が終わると急に俺の方に振り返った。

「ううん・・・」

一輪は歩いていた足を止めて俺をまじまじ見ながらまたしてもムツとした。

「なっなに……？」

「俐桜って結構背高かったんだあって……そういえば、こうやって話すの初めてだね。なんか嬉しい！」

一輪は自分の背と比べながら少し笑った。一輪は俺の肩より少し高いぐらいの身長。俺は、もうちょっと高いと思ってた。確かに、同じ高さで話すのは初めてだ。いつも俺は二階からしか話せなかったから……

ふと前を見ると、一輪が顔をぐっと近づけてきた。

「うわっ！ なっなに！？」

「俐桜君の瞳、グレーなのね〜キラキラしてて綺麗。」

瞳？ ああ、祖母譲りの灰色の瞳か。

俺はあまり好きじゃない。グレーの目は父親とも同じなのだ。この瞳を見ると、父親を思い出してムカつくんだ。

俺を覗く一輪の瞳は、黒く澄んだ、綺麗な目をしていて。

俺はその瞳を吸い込まれるように見つめていた。一輪の瞳は俺だけを映していた。

「一輪の目も綺麗だよ。それより、一輪の家ってどこにあるんだ？」

見つめ合った形になっていたのが少し恥ずかしくて、話を反らす。

一輪も少し顔を反らし、笑いながら答えた。

「あの林の向こう側にあるの。大きな家におばあちゃんと住んでるの。」

語尾が少し曇る。確か、祖父母とはあまり仲良くないと聞いたが。

「お前、両親は？」

と聞いて少し後悔した。こんなこと聞いてよかったのか？今まで、一輪が両親の事を話したことは無かった。聞いてみようとも思わなかった。

しかし、一輪は少し微笑みながら答えた。

「今、海外に出張中なの〜だから、今は手紙だけ〜」

出張か。でも、中学生で転校して、祖父母の家に居候って寂しくないのか？寂しいから、俺みたいな所に来るんじゃないのか？

「一人で寂しくないか？」

「うん！ 月に一回は手紙来るし、おばあちゃんたちがいるから寂しくないよ！」

笑いながら答えたが、その瞳は潤っていた。

寂しくない訳がない。強がってるけど、きっと寂しいんだ。その背中は何を背負ってるんだ……？

俺は一輪の頭を優しく自分の方へ引き寄せ軽く抱き締める。

鶯達が俺の悩みを消してくれたみたいに、俺も一輪の悩みを消して

やりたい。

一輪が俺を孤独から、ただ平凡でつまらない毎日から引っ張り出してくれたみたいに……

「強がらなくて良い。辛かったら、俺がいるから。泣いたっていいんだ。」

そう言っで一輪の綺麗な黒髪を撫でてもう片方の手で背中をさする。そうするとさっきまで固まっていた一輪は俺のパーカーをしっかりと握り締めながら大泣きしだした。

俺の中で嗚咽しながら何かを伝えようとする一輪を俺は頭を撫でて宥める。

辛かったな、今までこれだけ溜めて、誰にも言えず一人で寂しかったんだな。

俺は腕に少し力を入れて何度も“大丈夫”と唱えながら背中をさする。

少しすると、だんだん落ち着いてきた。

「うう、俐桜……君……わだし、もう嫌なの……」

詰まりながらそう言った。嫌？ 何が？

背中をさする手をゆっくりと頭へ移動させ、髪を撫でる。

「何が、嫌なんだ？」

心に届けという願いを込めて、優しく聞いてみる。一輪は握り締める手に力を込め、小さい消えそうな声で呟いた。

「私という……存在が嫌い。なんで……生まれてきたの？ 誰にも……必要とされて……ないのに。」

ージブントイウソンザイ。

一輪はパーカーを握り締めていた手を俺の背中に回し、しっかりと抱き付く。

誰にも必要とされていないなんて、そんな……。

「そんなことないよ。一輪が必要とされてない訳がない。」

静かな声で一輪に言い聞かせる。一輪を必要としている人はたくさんいるよ。俺なんかより……たくさんの人が……

「違う……私はみんなに必要とされてないの……」

「そんなことないよ！　なんでそんなこと言うんだよ！」

少し強く言うと、一輪は俺から顔を上げて涙で濡れた瞳で俺の目を見つめる。

「ごめんね、私嘘ついてた。みんなには海外って嘘言ってるんだけど、俐桜君には本当のこと言うね。本当は私、両親に捨てられたの……」

そう言った一輪は濡れた瞳をもう一度俺に抱きついて泣いた。

捨てられた？　なんで一輪が捨てられなきゃならないんだよ……必要とされていない存在。そんなの अच्छा いけない。一輪の存在を否定しているのは、親や家族だ。親が捨てたのが悪い、存在を否定した親類が悪い。

「手紙なんて嘘、手紙なんて来やしない……おばあちゃんも私のこと嫌ってるみたいだし、家に私の居場所なんかないの……私なんて、誰にも必要とされてないのよ……」

「俺がいる！俺は一輪が必要なんだよ！だから、そんなこと言うなよ……」

そう言っで一輪の肩を掴み、顔を見つめる。

そうだ。俺は一輪に救われたんだ……一輪がいたから、平凡な毎日から抜け出せた、生きる意味を与えてくれた。

今度は俺が一輪を救う番だ。一輪の為に何かしてあげたい、背中に背負っている重い荷物を軽くしてやりたい。

一輪は止めどなく流れる涙を流しながら俺を見つめる。

「ほん…とう…？ 本当に俐桜君は私を…必要としてくれてるの？」

「ああ。俺は一輪に救われたんだ。一輪を見捨てるわけがないよ。

俺は一輪に生きてほしいんだ」

なるべく優しく、ゆっくり話した。一輪は涙を流しながら俺を見つめた。

「私、生きてていいの？」

一輪の濡れた瞳に俺が映る。不安と恐怖に揺れる瞳が俺に問いかける。生きていたいと……

「当たり前だろ。一輪が生きちゃいけない理由がない。俺は一輪が生きていてくれて嬉しいよ。」

一輪の頭を撫でてやる。今日の俺は一輪の前では素直になれた気がした。今日言った事は俺の本当の気持ち。

その気持ちを聞いた一輪は大量の涙を流しながら俺に抱きついた。何度も大きな声を出して涙を流した。今まで溜めていた悲しみや苦しみ、辛さを吐き出すように……何度も何度も……

「ありがとう……ありがとう……」

だいぶ落ち着いてから俺は一輪の顔を覗いた。半分開いた目を何度も擦りながら一輪は俺を見上げた。自然に見つめ合う形になったがさっきより気にならない。一輪も俺をじっと見つめていた。

ずっとこのままいたいと思った。ずっと一輪といたい、こうやって触れていたい。今、俺がわがままを言ったら一輪はどう反応するだろう。頷いてくれるかな？ このまま、少し勇気を出して気持ちを伝えれば一輪は喜ぶかな？ 俺の気持ちを伝えようと口を開く……

「帰ろうか。」

口から出たのは俺の気持ちではなく、その場からの逃げ道。俺は一輪に気持ちを伝える事は出来ない。そんなことをしていい程の人間ではない。

「そうだね。俐桜君の身体に障るしね。」

一輪はそう言って俺から離れた。涙を指で拭い、ニコツと小さく笑った。鞆を持って軽やかに小走りをして道を歩く。

病気が発覚してからマイナスな事ばかり考え、死を受け入れ生きようとしなかった俺。何かあっても全て病気のせいにして、努力などしない。それでなくても、もう時期死ぬかもしれないのに今から何

を望むんだ。

そんな俺が存在を認めてもらいたいと願う一輪に何を言える……何を言ったところで、説得力の欠片もない。

俺は一輪を救えない。

救う資格がない……

俺は死へ向かうしか選択肢は残ってないのだ。

第五章

頭がぐらぐらして痛い。身体中が熱く、重い。息がしにくく、息が浅くなる。

視界がぼやけてまるで水の中にいるみたいだ。自然に涙が出てくる。俺って格好悪い……

必死に息をする俺に母親と先生が心配そうに見ている。

俺ってこんなに身体弱ってたんだ……ちよつと外に出ただけでこんなに弱ってしまうなんて……この体、もう駄目なのかな？

二の腕に小さな痛みが走る。この痛みは慣れた、注射を射した時の痛みだ。

「解熱剤を射れました。時期熱もひいてくるはずですよ。そしたら静かに眠れるはずです。」

先生が俺の頭を撫でながら母親に言った。母親は俺の手を握り、さすってくれた。握りしめた手を握り返す、その手がゆっくりと落ちていく。

浅い息を何度も繰り返すうちに意識が朦朧とし始めた。先生と母親の会話が聞こえなくなり、世界が真っ暗になった。光の射さない暗闇に1人。心細く、寂しい。

「俐桜君、大丈夫？　顔色悪いよ……」

帰っている途中一輪に言われた。もうすぐ家に着くという時に体の

調子が悪くなってきた。

頭痛と耳鳴りが酷くなり、視界が歪む。一輪がまっすぐ見えない……一輪には“大丈夫”と笑顔で返すと一輪は疑うような顔をしながら前を向いて携帯を何やら操作した。

こんな所で倒れたら一輪に迷惑がかかる。せめて家までは……畑の通りを抜け、あとこの坂を登れば家に着く。坂道に入る前に差し掛かった時、足から力が抜けた。

「俐桜君！大丈夫？ 俐桜君！？」

膝を着いて壁にもたれ掛かる俺を一輪が支えてくれた。一輪は助けを求めようと周りをキョロキョロ見ている。

息が出来ない……息をすることに必死だった。

そんな俺を一輪は助けようと何度も俺に呼びかけるが、息苦しく、ろくに返事も出来なくなった。

さすがにやばいと思ったのか一輪は携帯を取り出した。何処かに電話でもするのか？ 電話なんかされたら……

俺は一輪の手を押さえて止めさせる。

「一輪……病院に……電話は……ダメだ……大丈夫……だから……時期……治まる……から……」

胸を押さえつけ、息切れ状態で一輪に伝えようと一輪は涙目になりながら俺の背中をさすってくれた。

でも、本格的にやばくなってきたかも……息が苦しい……心臓が破裂しそうだ。視界が霞む……

そんな時、坂道の入り口に一台の車が止まった。

「俐桜君！？ やっぱりここにいたんだね……寄り道しちゃ駄目って言ったのに……」

声のする方に目をやると白衣姿の先生が車から下りてきた。先生：「なんでこんなところに……」

「一輪ちゃんだよな？ 知らせてくれてありがとう。俐桜君、一輪ちゃんに感謝だね。」

「どう……いうこと？」

先生は四つん這いになっている俺を壁にもたれ掛かるように地面に座らせ脈を確認する。

先生の手がとても冷たくて気持ちよかった。

「一輪ちゃんが僕に俐桜君の調子が悪いってメールをくれたんだ。だいぶ脈が速いな……家に帰ろう。体が弱っているんだ。」

先生は俺を抱きかかえて車に乗せて寝かせた。座席に寝ただけで自然に瞼が閉じていく。視界が歪んでいく。さっき一輪が携帯をいじってたのは先生にメールをしてたんだ……

「先生……俐桜君、大丈夫ですか？ ごめんなさい、私……俐桜君ごめんね……本当に、ごめんなさい……」

一輪は座席に横たわる俺を見て泣きながら何度も謝っていた。なんで一輪が謝るんだよ……一輪はなにもしてない。悪いのは寄り道をした俺だ。

本当に、俺は格好悪いよ……

「一輪ちゃん、大丈夫だよ。俐桜君は僕が治すから。今日はとりあえずお帰り。」

先生は一輪の頭を撫でながら優しく笑いかけた。一輪は静かに頷き
ゆっくり帰って行った。

俺、まだお礼言っていないのに……
行かないで……

薄く瞼を開くと薄暗い部屋の天井が見えた。

首だけを横に向け窓の外を見ると外は真っ暗だった。

闇に包まれた部屋。夏だというのに、とても冷たく寒い空気が部屋
に充満していた。じっと見つめていると、次第に目が闇に慣れてい
く。

重い上半身を起こし、頭を掻く。酷く汗をかいたらしく寝間着がべ
ちよべちよだった。

薬のお陰か頭痛も耳鳴りも治まっていた。いつもの吐き気もない。
なのに、胸の内のどこかに大きな穴があるみたいだ。

今のうちに何か食べておこうと重たい体を無理矢理動かして部屋か
ら出る。

一階のリビングに着くと電気がついていた。

「あら、俐桜。起きたの？ 何か食べれる？」

リビングには父親と母親がいた。

母親は予想がついていたが父親がいるとは思ってなかった……
いつも自分の部屋に籠もっている父親がリビングで母親と話してい
る。

俺は父親が嫌いだ。母親には悪いが無視して冷蔵庫からミネラルウ
ォーターを取り出し一気に飲み干す。

「俐桜。」

ミネラルウォーターが空になったぐらいに父親に名前を呼ばれた。俺の名前を呼ぶのは何年ぶりだろう……俺の名前は父親が付けたらしいが、その名前を呼ばれる回数は非常に少ない。

「なに？」

ペットボトルの蓋を閉めて口を拭いながら返事をする。しかし、目は合わせない。

「熱があるならさっさと寝ろ。」

素っ気ない言葉。

俺は父親を睨みつけてからペットボトルを握り潰してゴミ箱に捨て、リビングから出る。

母親が俺の名前を呼ぶのが分かったが、無視して階段を駆け上がる。何を言い出すかと思ったら、そんなことか……あんな父親と一緒に居たくない。子供を仕事の道具としか見てない、あんな父親なんかに……

部屋に戻り、勢いよく扉を閉め扉にもたれ掛かる。階段を駆け上がった為か、父親にムカつい為か呼吸が乱れた。ベッドに座りCDコンポのスイッチを入れ、苛立つ気持ちを静めるためにクラシックに聴き入る。

あの親父は俺の存在をどうとも感じてないのだろう。俺が死のうと生きようと、関係ないんだろう。最低だ……

何曲か聴くとカノンが流れ出した。カノンは一輪と始めて一緒に演奏した曲。

カノンは聞き飽きていたし、なんだかありきたりな感じてでいつも飛ばしていた。

しかし、一輪と演奏してからはカノンを聴くと落ち着く。一輪のフルートと俺のヴァイオリンのハーモニーを思い出すだけで自然に笑みが出てくる。

体を起こし机に開いているG線上のアリアの楽譜を見つめる。何度も聴いたこの曲を一輪とどう演奏するか、楽しみだった。

机の横に置いてあるヴァイオリンケースの蓋を開ける。この二・三日手入れをしていなかったから少し心配だったが大丈夫だった。

少し指で弦を弾いてみる。弦が振動し俺の耳に心地良い音が響き渡る。乾いた空気が潤った感じがした。反響音が消え、余韻に浸る。

今日は一輪に悪いことをしてしまった……俺が悪いのに、一輪は自分を責めてた。まだちゃんとお礼も言っていないのに……もう俺の事嫌いになったんじゃないか？

明日……一輪は来てくれるかな？

そんな不安に襲われ、自然と視界が歪んだ。ベッドに倒れ込み、静かに流れる雫がベッドに浸みる。

薄れゆく意識の中、車から見た一輪の姿は寂しげに帰る後ろ姿。

もう、俺の所に来てくれないんじゃないのか？　こんな弱い俺を嫌いになったんじゃないか？

そう思われるのが嫌で、必死に自分の中で否定した。否定して否定し続けて、気が付いた。

俺は一輪に何かしてやれてるのか？

俺は一輪に救われた。一輪と会ったから、毎日が楽しくなった。

でも、俺は一輪に何もしてない。ただ毎日話して、演奏しただけ……一輪にとって、俺は何なんだろう……？

歩調に合わせ靴音が廊下に響く。欠伸を噛み殺し、乱れた髪をガリガリ搔く。

カルテを見ながら次の診察まで少しの休みを過ごす為に自分の部屋へ足を運ぶ。

廊下ですれ違う患者さんに笑いかけながら、窓の外を見ると太陽が真上から少しずつ傾き始めていた。

最近だんだん日が短くなってきた。もう夏が終わろうとしてる。下がってきた折り曲げた白衣の袖を上げ直し廊下を歩く。

そんな時、後ろポケットに入れている携帯が震えた。

珍しく携帯が鳴った為びっくりした。普段携帯など滅多に使わない、と言うより連絡が来ても忙しくて取ることが出来ないのが現実。今日はタイミングが良く、取れた。

誰からだ？ 大学の奴の合コンとかの誘いか？ しつこく誘ってくる奴いるからな……

携帯の液晶画面を見ると“一輪ちゃん”と書いてあった。

一輪ちゃん？ まあ、また珍しい人からのメールだな。

メールを開くと、文章に目が離せず、背中冷や汗をかいた。

『俐桜の様子がおかしいんです。顔色が悪くて、何だか苦しそうです。今俐桜君の家に向かってますので、来てください。』

一輪ちゃんからのメールを見てからすぐにカルテをナースステーションへ投げ捨て、ちよつと出てくるとだけ伝え、背中の罵声を無視して病院を出た。白衣のままなのに気が付いたが無視して車を走らせる。

あんなに寄り道しちゃ駄目って言ったのに……薬の力で一時的にマシになっているだけで、まだ体は完全に治ってない。早くしないと、手遅れになる。

必死に車を走らせ、道に歩いている人を見る。俐桜君どんな服着てたっけ？ 確か、青色のジャンパーだったけ？ 青色、青色……探している、田んぼの中を歩く二人の子供が目に入った。

きつとあれだ。青じゃなかった、ベージュだった……少し自分の記憶力に落ち込んだ。

ゆっくりなペースで歩いている二人の進行方向から俐桜君の家の坂の前に着く。車を先回りさせる為、回り道だが引き返す。頼むから間に合ってくれ……

坂の前に着き、曲がり角を曲がると俐桜君が壁に手をかけながら苦しんでいるのを見つけた。

その横には周りをキョロキョロしながら俐桜君を支える一輪ちゃんがいた。

「俐桜君！？ やっぱりここにいたんだね……寄り道しちゃ駄目って言ったのに……」

そう言いながら車を降りる。一輪ちゃんは俺を見て涙目になりながら俐桜君に知らせる。

俐桜君は俺の姿を見てびっくりしたように薄く開かっていた目を見開いた。

「一輪ちゃんだよね？ 知らせてくれてありがとう。俐桜君、一輪ちゃんに感謝だね。」

うずくまるような姿勢の俐桜君を壁にもたれ掛からせ、脈をとる。まだ、大丈夫みたいだ。もうちょっと遅かったら手遅れになるんだからね……

「どう……いうこと？」

俐桜君は苦しそうに息を荒げながら俺に聞いてくる。目は虚ろになり、完全に体を壁に預けて座っている。このままだと、ヤバいな……

「一輪ちゃんが僕に俐桜君の調子が悪いってメールをくれたんだ。だいぶ脈が速いな……家に帰ろう。体が弱ってるんだ。」

壁にもたれ掛かってぐったりしている俐桜君を車に寄せようと抱きかかえる。ちよつと力を込めたが俐桜君は思いの外軽く簡単に持ち上がった。こんなに痩せているのか……もうちよつと太らせなきゃ。目は開いているが、なんにも映さない目をして苦しむ俐桜君を車の後部座席に寝かせる。寝かせると自然に目を薄く閉じていく。

「先生……俐桜君、大丈夫ですか？　ごめんなさい、私……俐桜君、ごめんね……本当に、ごめんなさい……」

一輪ちゃんの目には薄く涙を浮かべながら何度も謝っていた。何度も、何度も謝るうちに頬に涙が伝った。

俐桜君の体調が悪くなったのは自分のせいだと思っているんだ……本当に良い子だな。だからこそ、今まで何にでも無関心だった俐桜君の心を動かすことが出来たんだろう。

「一輪ちゃん、大丈夫だよ。俐桜君は僕が治すから。今日はとりあえずお帰り。」

そうやって俺は一輪ちゃんの頭を撫でる。一輪ちゃんは小さく頷き、指で涙を拭いながら帰って行った。一輪ちゃんは賢い子だよ。今の状況をちゃんと理解している。つくづく彼女には感謝だ。

帰って行く一輪ちゃんを見送り、車の後部座席の俐桜君に目をやる。蹲りながら涙を流していた。呼吸困難寸前の状態で嗚咽しながら涙

を止めどなく流している。今までずっと会いたがっていた一輪ちゃんやんとやっと会えたというのに、自分の体のせいで一輪ちゃんを泣かせてしまった……自分を責めているのか……

「俐桜君……大丈夫？ 悔しかったのか？」

車の外から俐桜君の様子を窺うとゆっくり頷いた。途中から呼吸が不規則になりだした。先程まで薄く開かれていた目の焦点が合わなくなっている。

様子がおかしい……慌てて俐桜君の脈をとると先ほどより速くなっていた。このままじゃ駄目だ……

「俐桜君、落ち着いて……とりあえず落ち着いて。」

落ち着かせなきゃ、このままじゃ俐桜君の体が保たない。

直ぐさま運転席に座り、車を発進させる。俐桜君の家の横に乱暴に車を止め、俐桜君を抱きかかえて車から降ろす。抱きかかえた時、すでに俐桜君はほぼ意識がなくなっている状況だった。

インターホンを押すがなかなか人は出て来なかった。

少しして静かに扉が開いた。

第六章

荒かった寝息が治まり、歪んでいた顔も普段の寝顔に戻った。額に伝った汗を拭いてやると少しだけ表情が緩んだ様に見えた。薬が聞いてきたようで良かった。

俐桜、良く頑張ったな……

担当医が家に飛び込んできた時は流石に驚いたが、彼の腕の中の俐桜を見た瞬間に体が動いていた。

俐桜の頭を少し撫で、電気を消して扉を静かに閉める。

「だから、痛いってば！」

俐桜君は目に薄く涙を溜めながら叫び、腕を引っ込めてしまった。全くここら辺はまだ子供だなあ

「じゃあ、暴れないで。ほら、包帯がぐちゃぐちゃになっちゃったじゃないか……」

今日は発疹を掻き筆った傷痕に薬を塗り、包帯を巻き直す。

この作業が結構痛いらしく、俐桜君は何度も手を引っ込めてしまう。何度も引っ込めるうちに包帯がぐちゃぐちゃになり外れてしまった。

「だってえ……これ、痛いんだぜ。」

小さく呟きながら腕をさすっている。

包帯や布が傷痕に触れると繊維が刺さり痛いらしい。発疹の傷痕は飛び火しやすいので、早く治療したいんだけどなあ……

「わかった。じゃあ、飴をあげよう！」

「先生はそんなに俺が喜ぶと思ってんの？」

やっぱり、ダメかあゝ小さい子だったらこれでいけるんだけどなあゝさすがに中2の俐桜君には効かないか……

「やっぱ駄目か？　じゃあ大人しく治療を受けなさい。」

ボロボロになった包帯を俐桜の腕から回収し、巻き取りながら睨みつける。

ベッドの上でゴロゴロしていた俐桜君はベッドの上に胡座をかき、嫌そうな顔をしながらも静かに腕を差し出した。流石に子供じゃないんだ、聞き分けはいいね。

「良い子だね。」

さすったせいでとれてしまった薬を腕に塗り直し、包帯を巻いている。

巻いていくと俐桜君の頬がピクピクし始める。これは俐桜君が痛いときにする癖だ。

でも、逆の腕でズボンを握り締めながら必死に痛みに耐えている。偉い偉い。

「はい、お終い。よく頑張りました。」

包帯の端をテープで止め、薬のついた指をタオルで拭く。

俐桜君は終わったと同時にベッドに倒れ込み大きなため息をついた。投げ出した足がベッドからはみ出した。

「終わったあゝなあ先生、俺頑張ったからさあゝ外に……」

「駄目。何度言えば分かるの？ 君はまだ外に出れる体じゃない。」

捨てられた子犬の様な目をして頼んできたが、キツパリ言い返す。

俐桜君は外に出て倒れたというのに、まだ外に出たがっている。俐桜君は外に出られる程病気は治っていない。

いや、むしろ様態は悪い方向に進んでいる。薬に抗体が出来始め、今までの薬ではどうにもできない。少し強い薬を使ったが、彼には強すぎた。今も病魔は彼の身体を蝕んでいる。

「俺、元気だぜ！ 頭痛もしないし、吐き気もしない！ 今日気分も良いんだ。ねえ、一時間だけ、いや30分、10分だけでも良いから！ お願い！」

俐桜君はそう言って両の手の平を顔の前で合わせて頼んだ。

でも、今彼を外に出すことは出来ない。今彼の中にいる病魔は確実に進行を進めている。

「駄目なものは駄目。最近風が冷たくなってきてるし、君の体に障る。」

カバンに器具をしまいながら言うと俐桜君はムスツとして顔を枕に押し付けた。

すぐへそ曲げるのもまだまだ子供だな……

ふと机の上の写真立てが目に入った。

綺麗な川が流れており、木々が生い茂りとても風流な写真が飾られていた。

そういえば、いつもこの写真立ては伏せてあったのに、今日は伏せてない。

「この写真、綺麗だね。どこで撮ったの？」

写真立てを手にとって聞いてみる。

今まで枕に顔を埋めていた俐桜君は写真立てを持った俺の姿を見ると、ベッドから飛び降りすぐさまにその写真立てを取り上げた。

「なっ、ななな何やってんだよ！？ 勝手に見るな!？」

取り上げた写真立てを引き出しに仕舞った。

顔を少し赤らめながら静かにベッドに戻る。

別に恥ずかしい写真ではないと思うんだけど、なにが嫌だったんだろう？

俐桜君は枕で顔を半分隠しながら、俺の方を向いて小さな声で呟いた。

「……………言わないでよ。」

「ん？ 何が？」

「母さんに…………その写真のこと…………言わないでよ…………」

…………はい？ お母さん？ なんで川の写真がお母さんに繋がるんだ？
そこまで聞いたら、気になるじゃないか。

俺はちよつと悪い考えが頭に思い浮かんだ。

「わかった。言わないであげる。」

そう言うと、俐桜君は安堵の息をもらして枕に顔を埋めた。

「でも、一つ条件ね。この写真におけるエピソードを話さない。」

人差し指を突き立てて俐桜君に向かって微笑みかける。

俺の発言に驚いた俐桜君は“ハア!?”と大きな声で叫んだ。ちよつとずるいかもしれないけど、気になるもんは気になる。知りたいから知る。人間の性だな。

「なっ、なんでだよ! だっ、だだだ駄目に決まってんじゃん!」

俐桜君は今までに無いほどのどもり様。これは何かあるなあゝここまできて引き下がれない。よし、今日は聞き出すまで帰らないぞゝ

「じゃあ、この写真のことお母さんにバラすよゝほれ、話しちやいな。」

俺はこれでもかという作り笑顔をして俐桜君の横に座る。内心自分の良心は卑怯だと言っているがそんな良心は今はずいぶんなら。

ベッドが少し軋み、俐桜君は枕に顔を埋めて考えていた。そんなに知られたくないものなのだろうか……

「……わかったよ。話すよ……」

俐桜君は物凄く渋々了承した。にっこり微笑みかけ、俐桜君が話すのを待つ。

俐桜君はベッドから立ち上がり机の引き出しからさっきの写真を取りベッドに戻ってきた。

「この写真は、小さい頃……まだ病気になる前に唯一家族で行った場所なんだ……」

俐桜君は写真立てを見て柔らかい笑顔をして話し出した。そんな顔出来るんだ……

唯一家族で行った場所……か。俐桜君の父親は大手企業の社長。仕事で滅多に家に帰ってこない。だから、俐桜君は父親を嫌いだし、父親も自分を嫌っていると言い張っている。

俺はそんなことないと思うけど……

「この写真の場所に、小学校三年生の時に両親と叔父さんで行ったんだ。」

小学校三年生と言うことは、病気になった年。病気になる直前の写真か……

その時はまだ俐桜君も父親のことを嫌っていない時なのだろう。

「父さんが久々に休みが取れたから、みんなで山の中樞まで車で行って川っぺりで遊んだんだ。その時は叔父さんもまだいて、本当に楽しかった。」

先程から言っている叔父さんとは俐桜君の叔父さんであり、俐桜君のお父さんの弟だ。彼は三年前に不幸にも交通事故で亡くなってしまった。

亡くなる前は時々俐桜君のお見舞いにも顔を出し、お土産を持ってきたり病院内で遊んだりしていた。父親より父親らしい人で、入院中俐桜君を唯一笑顔にさせることが出来る人だった。

その時に撮った写真なんだ。

俐桜君は写真を眺めな、手の平の中で転がしながら遊びながら俺の顔を見た。

「本当に言わないでよ。」

わお、念を押してきた。そんなに言われたくないのだろうか……思春期の青年はよくわからない。

「わかってるよ。言わない言わない。」

「言ったら俺、先生の悪口病院中にばらまくからね。」

そっ、そこまでするか！？　これは一切他言出来ないな……したら俺の評判が落ちだ。

「わかった。俺の名誉にかけて絶対に他言しない。だから、詳しい話を聞きたいなあ」

頬杖をし、そう頼んでみると、俐桜君は小さくため息をついて下を向いた。

「正直、この日を境に俺の人生狂い始めたんだ。」

太陽の光が反射し、水がキラキラと光っていた。

森がざわめき、耳には風と鳥の囀りしか聞こえない。

空気は澄んで吸い込むだけでリフレッシュ出来た。

都会の五月蠅い車の音も、臭い排気ガスの匂いもしない。

ズボンの裾を捲り上げ、靴と靴下を岩の上に丁寧に並べて置いておく。石ころばかりの道を痛いながらも裸足で歩き川へ近づく。

澄んだ水に静かに足を浸けると足からひんやりとした冷たさが体中に広がった。冷たさ味わいながら膝まで浸かり川の中を覗く。

「父さん！ 見てみて！ 魚がいっぱいいるよ！」

叔父さんとバーベキューの用意をしている父さんに大きく手を振る。父さんは小さく手を振り返してくれた。

「俐桜、あまり深く行っちゃ駄目よ！」

お母さんの声に元気に返事をして、魚を捕まえようと試みた。しかし、小さい手には魚は掴めず逃げてしまう。

なかなか上手くいかず、何度もやっているうち、捲り上げたズボンが下がり裾が濡れた事に気が付いた。

もう一度岸に上がりしゃがみ込み、濡れた裾を捲り上げる。今度は膝上まで上げる。しかし、何度やっても立ち上がると同時に下がってきてしまう。

「どないしたんや、俐桜。裾あげたいんか？」

イライラしながら裾を上げていると叔父さんが聞いてきた。

静かに頷くと叔父さんは黒く汚れた軍手を取り、俺の裾を捲り上げて持っていた紐で括ってくれた。

「これでずり落ちんやろ。ほれ、遊んでき。」

叔父さんは俺の背中を軽く押して優しい笑顔で送り出した。
叔父さんはオオサカという場所に住んでいるらしく、変な言葉を使う。

初めは何を言っているか分からなかったけど、最近ちよつとずつわかってきた。

川の中に入って石ころを拾い上げ、深い場所に投げてみる。
ポチャンという音、綺麗に広がる波紋。

「俐桜、ご飯だぞ。上がってこい。」

父さんの声を聞いて急いで上がって父さんに飛びつく。

お母さんとお父さんが作ってくれたバーベキューを美味しく食べる。

「ほら、俐桜。口のどこタレ付いちゃってるわよ。」

お母さんは俺の口をハンカチで拭いてくれた。叔父さんはビールを飲みながら笑っていた。

お父さんもビールを飲みたいらしいが車なので飲めないとぼやいていた。俺はお父さんの膝の上でジュースを口にした。

ご飯も食べ終わり、お母さんたちがお皿などを片付け終わるのをひたすら待った。

「よし、俐桜。遊ぶかあゝ」

少し酔っぱらった叔父さんは俺を抱き上げて川に入ってしまった。背の高い叔父さんの上から川を見ると面白いほど景色が変わった。俺ももっと背が高くなりたいな……

「おい、遊馬^{ゆうま}。酔っ払って俐桜を落とすなよ……」

「大丈夫やってゝ俺そんな飲んでへんから。なあ、俐桜」

お父さんが叔父さんに注意をするが、叔父さんは笑顔で俺を抱いて川へ入っていく。

俺も楽しくて、素直に頷いた。お母さんとお父さんはため息をつきながらも俺を叔父さんに任せた。

「俐桜、あまり奥行ったら駄目だぞ。遊馬、本当に気をつけろよ。」

お父さんは何度も叔父さんに注意を促す。

「分かつとるってゝほんま兄さんは心配性やな……ちよい待つとき、今網持ってきたるわ。それで魚でも捕まえよか。」

叔父さんは俺を一度岸に置いてから、車へ向かって行った。

待たけて言われたけど、待ちきれず川へ入って行くことにした。ズボンが少し濡れたけど気にせず入っていく。足場の岩に苔が張り巡らされており、ヌルヌルしていた。

「あつ、俐桜！ 待っつけ言うたのに……今行くから……」

「ねえ遊馬さん。ちょっとこれ片付けるの手伝ってくれませんか？」

「あつ、はいよゝ今行くわゝ」

叔父さんは網を持って俺の所に来ようとしたが、お母さんに呼ばれて網を川辺に置いてお母さんの所に戻っていった。

俺はその間に少しずつ川の奥へと進んでいく。

綺麗な川の水に見とれながらゆっくり進んでいく。

なんだろう、水の中にキラキラするものがあつた。もうちょっと近づいたら見えるかな？

少し足をずらし、覗き込む形になった。

「あっ！」

そんな時、踏み込んだ石の苔が滑り深い部分に落ちた。

視界が回り、空が目の前に見えた。空がこんなにも近いよ。

「俐桜!？」

最後に聞こえたのはお父さんの叫び声と水しぶきが川の水面に弾ける音だけだった。

第七章

バーベキューの片付けをしていると、俐桜が川の奥へ進んで行くのが視界に入った。

（あんな奥まで行ったら危ない……）

だが、直ぐに遊馬が俐桜に話かけた。

まあ、遊馬がいるしこのコンロを片付けたら俐桜のところへ行こう。まだ、時間はあるし川の深い場所はまだ俐桜一人では行けない。

コンロの足を取り外し、車に詰め込む途中。コンロの先に俐桜の姿が見えた。

それは俐桜が川の中へと落ちていく姿だった。

「俐桜!？」

コンロを放り投げ、川へと入り無我夢中に進む。

しかし、水の中は非常に歩きにくくなかなか前に進まない。とりあえず俐桜を助けなければ。

やっとのことで、先程俐桜が消えた場所まで着いた。

俐桜、どこ行っただ……

遊馬も網で何度も水の中を掻き回すが一向に俐桜は姿を現さない。

「俐桜!？ 俐桜、どこだあ!？ 返事をしろお!？」

俐桜が……俐桜が消えた。俺の息子が消えてしまった。

名前を叫ぶ度、視界が揺らぐ。俐桜、出てきてくれ。いなくならないでくれ……俐桜。

水の中へどんどん入っていくが、一向に俐桜は見つからない。

「兄貴！ ごめん、俺がちゃんと見てやらなかったから……ほんまにごめん！ とりあえず、川下を捜そう！」

遊馬は少し目に涙を溜ながらも必死に探していた。
そうか、流れに沿って探せば良いんだ。

「桜！ 川に沿って俐桜を探してくれ！」

岸で座り込んで泣いていた桜に叫ぶと桜は俺を見て頷いた。すぐに立ち上がり、川を凝視しながら川に沿って歩く。
泣いている隙はない。俐桜の命がかかっているんだ。

「俐桜！ 聞こえたら返事しろ！ 俐桜！」

もう、服が濡れようが構わない。川に飛び込み綺麗に着水。

潜水で川を探すが俐桜の姿は見えない。息が続く限り潜り続け俐桜を探す。息が苦しくなり息継ぎをして、また潜る。

川の流れに沿って流されていくと何かが見えた。

人の足。青白く、血色の悪い死体のような足が岩の影から見えた。

俐桜だ。グレーのタンクトップが岩に引っかかり水面に浮かばずに沈んでいた。真っ青な顔に半分開いた口、力なく浮力に逆らわない四肢。

すぐさま泳いで俐桜を抱き、水面に上がる。

「俐桜！ ……目…開けろ……俐桜！」

息が切れる。

単に潜って酸素が足りないのではない。恐怖から心臓が張り裂けそ

うで息が続かない。

口に手を当てると息をしていなかった。

まずい、非常にまずい。速く水を吐き出させないと脳に酸素がいなくなり、取り返しのつかないことになってしまう。

「遊馬！ 桜！ タオルだ……タオル用意……してくれ！」

真っ青な顔をした俐桜を抱きながら岸へと向かう。

岸に着くと遊馬と桜が車に乗っていたマットとバスタオルを岸に敷いた。

遊馬に俐桜を渡し俺は息を整える。髪から水滴が滴り落ち小石の色を変える。手足に力が入らない。俐桜の物凄く冷たい体の感覚がまだ腕に残っていた。

「俐桜！ 息をしろ、吐き出せ！ 俐桜！」

遊馬がマットの上に俐桜を寝かせ胸部を強く押す。小さな俐桜の体が押される度に大きく揺れる。

俺は息が整ったので、俐桜に人工呼吸を施す。桜は涙を流しながら俐桜の冷たい手をさする。

このまま息をしなかったら、俐桜が死んでしまう。死？ そんなことを考えるな。俐桜はまだ生きている、まだ助かる余地はある。

頼む、息をしてくれ……水を吐き出せ！ 頼む！

何度目かに俐桜が小さく咳き込み始めた。

これをきっかけに遊馬の胸部圧迫を強めると、激しく咳き込み水を吐き出した。

全ての水を吐き出し自然に呼吸出来るようになった俐桜を見て俺たち三人は安堵の息を漏らした。良かった……

桜はもう一枚のタオルで俐桜を丁寧に包み体温が下がらないようにし

た。少しすると顔色も戻り、静かに呼吸を繰り返していた。良かった、これならもう大丈夫だろう。

ずぶ濡れで重たいTシャツを脱ぎ水を絞る。安堵で一気に疲れた。とりあえず俐桜が無事で良かった。

しかし、目を覚まさない限り完全に安心とはい切り切れない。目を覚ましてくれればという願いを込めて俐桜の頭を優しく撫でた。濡れた髪が頬にくっつき、ひたひたと静かに雫をタオルへと落とす。

「ほんま良かったわ。兄貴、ほんまにごめんな。俺がちゅんと見とったら……」

遊馬は深く頭を下げて謝った。別に遊馬が悪いわけではない。俺も桜も遊馬を責めるつもりはない。

「いいよ。とりあえず、俐桜が助かってよかった。」

桜は安堵で涙を流し、俐桜を抱き締めていた。そんなに抱き締めたら俐桜が苦しいだろう……

「うっ……」

桜の暖かさのおかげか俐桜声が漏れた。俺と遊馬は桜の腕の中の俐桜を覗き込むと瞼を薄く開いた。虚ろな目で俺を見つめた。俐桜は何かを伝えようと口をパクパクと動かしていた。

「なんだ？ 何が言いたいんだ？」

遊馬が俐桜に耳を傾け聞き取ろうとしていた。小さい声で何かに耐えるように訴える。やっぱどこか怪我でもしたのか？

「くっ……苦しい……母さん……」

桜によって俐桜の首が締められてはいた為、息がしにくかったらしい。そりゃそうだ。

「あっ！ ごめんなさい！ 俐桜大丈夫？」

大丈夫な訳ないだろ……ただでさえ酸素が足りてないに余計にダメにしてどうするんだ……

「俐桜大丈夫か？ どこか怪我してへんか？ 痛いとか、変なところないか？」

遊馬は俐桜の顔色を窺いながら聞いていた。俐桜は桜に寄りかかってた体を自らで立ち確認している。見たところ、怪我はないようだ。

「大丈夫だよ。お父さん、お母さん、叔父さん……ごめんなさい……」

俐桜は下を向いて謝った。濡れた髪から水滴が落ちた。そんな素直な俐桜を俺は優しく頭を撫でた。

その後、俐桜は変わらずに元気だった。どうやら、元気になったようだ。

川には入らず遊馬のカメラで遊ぶ。

どうやら遊馬が持ってきたカメラが気に入ったらしく、先程からいたるところを撮りまくった。

そう言えば、親父がカメラのやり方をまだ幼い俐桜に教えていたな。

川の辺に立ち、写真を撮るが俐桜の手には大きいカメラ。シャッターを押す前に手がブレて上手く撮れない。満足いかない俐桜は顔を歪めながら、ため息をつく。そして、俺の方へ駆け寄ってきて。

「お父さん、お父さんが撮ってみてよ。」

俐桜は小さな手に包まれたカメラを手渡してきた。俐桜に渡されたカメラを構え、川を写す。

「父さんも、あまり上手じゃないぞ……」

そして、ゆっくりとシャッターを押した。

シャッター音が川に響き渡り、遠くで野鳥が飛び去った。

「この写真は、そのとき父さんが撮った写真なんだ。」

俐桜君はそう言って写真立てを握りしめた。その後、写真立てを机の上に置き、伏せた。

「その写真を何でお母さんにバレたくないの？」

俺は単純に聞いてみた。別に思い出の写真ならバレても良いのでは？
そう言うと、俐桜君は少し恥ずかしそうな顔をして俺を見た。

「この写真、父さんに渡さないで、持っていること内緒なんだ。父さんの写真があまりに綺麗だったから……黙って貰ったんだ。」

なるほど、写真が好きだからこそやってしまった事だな。

父親の写真が綺麗で、黙ってパクってしまったと。

それは言えないかもね。

「でも、その日から人生が狂ったって？」

「その日を堺に俺の人生が悪い方向へと向かっていったんだ。」

俐桜君が言うに、その後から父親の仕事が忙しくなり、滅多に帰ってこなくなった。

俐桜君は体調を崩しがちになり、病気が発覚した。

約二年間の入院生活の間、父親は一回もお見舞いに来なかった。それがきっかけで俐桜君は今まで好きだった父親が嫌いになった。

初めの方はクラスの子が良くお見舞いに来てくれていたがだんだん誰も来なくなる。

そして、叔父さんの事故死。それ以降俐桜君は半分鬱の様な状態になってしまった。

ずっとそばにいたのは母親のみ。そんな周りがどんどん離れていくのは辛かっただろう。

「そうか、これが最後の思い出なんだね。」

「まあ、そう言うこと。もし俺の病気が完治しても、もうこの時には戻れない。だから、辛くなったらこの写真を見てあの時の事を思い出すんだ。女々しいかもしれないけど……俺これで何度も救われたんだ。」

俐桜君はそう言ってベッドに寝そべり天井を見上げた。

女々しい事なんてない、希望があるのは病人にとってはとても良いこ

とだ。

もう戻れないものを思い続けるのは、人間には誰だってある。

俺は胸にかけられた薄汚れたプレートのパendantを握りしめた。

俐桜君はそんな俺を見て疑問に思ったのか寝転がったまま首を傾げた。

「前から思ってたんだけど、先生がいつも首からかけてるそのパendant……どうしたの？　だいぶ汚れてるけど。大切な物？」

俺の手を見ながら俐桜君は聞いてきた。

「ああ、これかい？　これは俺の大切だった人から貰ったものなんだ。」

先生はそう言ってパendantを服の中にしまつて軽く胸を叩いた。

“大切だった人”。

この言葉が突っかった。なんで過去形なんだ？　先生は別れた彼女を引きするような性格じゃない。それに、今まで正確に付き合った事は無いと言っていた。

「だった、って……どういうこと？」

正直に聞いてみた。今日は俺もいろいろと話した。世の中等価交換、先生も何か話してくれないと不公平だ。

先生は少し考えて、俺の目を見た。その目はとても悲しげだった。

「まあ、俐桜君も話してくれたし……俐桜君には話そうかな。俺、

子どもの頃、肺ガンで入院してたんだ。」

肺ガン？ 先生が、小さい頃に病気になってたなんて……ガンなんて、そんな……

「俺は手術を拒んでたんだ。正直俺は親もいなかったし、何処に行けばいいか分からなかったから。でも、そんな俺の考えを変えてくれた人がいたんだ。」

先生が手術を拒んでいた。今医者になって手術を進める側の先生が拒んでるなんて。それに、俺に手術を勧めたのも先生だ。俺の一回目の手術は骨髄が合わずに失敗。そして、俺が珍しい血液型だったという事もあって、手術出来る回数が限られる。その上限を決めたのも先生だ。

「彼女はとても笑顔が綺麗で、明るくて天真爛漫で、とても病気をしている様な子じゃなかった。でも、彼女は末期の胃ガンで、俺以上に病状は悪かったんだ。その彼女は、俺に手術を受けるように言って、そのまま息を引き取ったんだ。」

息を……引き取った。死んじゃったのかよ……そんな子が……

笑顔が綺麗な女の子。そう言われたとき、一輪の笑顔が一瞬頭の中に浮かんだ。

って……何で一輪が出てくるんだよ！

「この通り手術は無事成功、生きてるよ。このペンダントはその彼女が死ぬ直前に貰った物なんだ。」

つまり、彼女の形見。

先生はそう言って、ゆっくりベッドの後ろ手を着いてもう一度ペン

ダントを服から出した。

汚れたプレートのパendantを首から取り外し、ゆっくり俺に投げた。

俺はそのpendantを受け取り、見てみる。プレートには何か文字が掘ってあった。掘ってある文字は読めない。

「俺は彼女みたいな人を出さないために、医者になったんだ。まだ新米だけど、この仕事に誇りを持っている。でも、やっぱりどんなに精を尽くしても命を助けることが出来ないときがあるんだ。その時は、ものすごく辛い。俺がいる意味が分からなくなる。そんな時、俺もこのpendantを見て励まされるんだ。俐桜君と一緒にだね。」

先生はベッドに寝転がり、顔だけを俺に向けて笑った。

先生と俺は一緒の状況にある。

先生と初めて会ったとき、俺に言った言葉が頭に甦った。

『君が、俐桜君だね？　よく……頑張ったね。』

小学5年生の時、担当医の先生が変わった。

前の先生の際は、診察も治療も辛かったから逃げ出したり抵抗したりしてきた。

しかし、この先生に代わってから徐々に受けるようになっていった。

今まではずっと“頑張れ”としか言われなかった。こんなに頑張っているのに、これ以上何を頑張れと言うのだ……俺は今までもずっと頑張ってきたのに……なにが、頑張れた……

そう思っていた俺にとって、先生の言葉はとても嬉しかった。分かってくれた。俺の苦しみを分かってくれると思った。

だって、この人俺と同じ目をしていた。俺と同じ、希望を持ちながらも絶望を感じている目だ。

「あつ、この話、内緒だよ。こんな話他の人にしたことないんだからな。おっと、そろそろ病院に戻らなきゃ。じゃあ、また来るけど絶対に外に出ちゃ駄目だよ!」

そう言って俺の手のペンダントを取って、首にかけて立ち上がった。立ち上がって荷物を持ち笑って部屋から出て行った。

そんなこと言われなかったって、今日は出て行かないよ……もうすぐ……

「俐桜君! 遊びましょう!」

ほら、来た。

第七楽章（後書き）

今回は先生が誰かが分かりましたね！

「空虚少年」を読んでいた方はおわかりになったでしょう！
先生、結構好きです！

次回で、一気に動きがあります。

お楽しみに！

では、Have a nice day!

第八章

気分が悪い。

体調が優れない。

薬を飲んでからだいぶ経つ。

いつもなら薬が効いてきて、楽になってくるはずなのに……

薬が効かなくなるほど、病気が進行しているのか？　もう、死んじやうのかな？

吐きそうで、体が痛くて、泣きそうだ……

こんな生活が続けてもう五年近く経ってるのに、もう慣れたはずなのに……慣れているのに、何でこんなに辛いんだ？

ベッドにもたれ掛かり、ボーと部屋を眺める。

和室に不自然なベッド、ステレオとCDコンボ、小さな勉強机。見慣れてこの部屋を何度も眺めてきた。

この部屋は俺の牢屋だ。

この部屋から、俺は出ることが出来ない。この鳥籠から出ることの出来ない鳥の俺。俺はこの部屋の窓からただ空を見上げることしか出来ない。

自由の空を飛べない、羽をもがれ、首輪をされた鳥。

外の空気が吸いたいと思い、ベッドから立ち上がり窓から外を眺める。

ふと、机の上に置いてあるカメラを目に入る。

そう言えば、最近カメラを手にすることが少なくなった。

昔はカメラしか依存するものがなかった。だが、一輪と会ってからカメラ以外の楽しみが増えた。久しぶりにカメラに何かを収めよう。

窓の近くに椅子を置いて外を眺める。

日が傾き、田園風景を照らしている。そんな風景を何回も見てきた。この風景を見ると、少しだけ心が落ち着いた。

その時、ふと田園風景を見ると一輪が数人の女の子が楽しげに歩いているのが見えた。みんな、あんな友達がいるのが普通。

でも、俺にはいない。それが悔しかった。

鶯がいたけど、前回会ったとき鶯にも友達がいた。

そんな楽しげに笑う一輪と友人に向けてピントを合わせる。

そして“カシャ”という音を出してカメラのシャッターを切った。

一輪も……俺を置いていくのかな？

「俐桜君、こんにちは」

少しして一輪が来た。

いつも通りの笑顔。いつも通りの笑い声。

でも、その笑顔って俺だけじゃないんだろ？

「おう……」

口を開くと吐き気がするため短く返事をしといた。一輪はいつも通り家の扉に座り俺へと話しかける。

俺はカメラを机に置き、窓に肘をついて一輪を見る。

「俐桜君、体の調子どう？」

一輪は首を傾げながら俺に聞いてきた。

その一つ一つの仕草が可愛らしい。そんな彼女に心配してくれるのは嬉しかった。

「大丈夫だよ。」

短く返事をする、一輪は小さく微笑み、楽しそうに歌い始めた。今日はフルートを持ってないようだ。久しぶりに一輪の歌を聞いて心が落ち着く。

歌を歌い終わり、少ししてから一輪は俺のことを見つめた。

「俐桜君、今日少しだけ降りてこれない？」

いきなりの一輪の申し出。

嬉しかった。一輪の方から言ってくるとは思ってなかった。でも……

「ごめん……俺、降りれないんだ。」

俺も降りたい。また一輪と近くで話したい。近くに行きたい。なのに、俺はこの部屋から出れない。出れないだけじゃない、俺に自由は無い。

「そうなの…？ 少しだけでもダメ？」

一輪は顔の前で手を合わせて頼んできた。一輪がこんなに言ってきたことない。今日、なにかあるのか？

「駄目なんだ。」

分かってよ。俺だって降りたい。分かってくれよ。出れない自分が嫌い、ムカつく。頼むからこれ以上、俺を誘惑しないでくれ……

「でも……」

そう言う一輪に一瞬ムカついた俺がいた。

「俺だって降りたいよ！ でも、こんな体じゃ無理なんだよ！ 俺の気持ちも知らずに勝手なこと言うなよ！」

こんな事言うつもりじゃなかった。でも、俺の中で何かが切れた。下を向いて叫ぶ。口が止まらない。もう、自分の感情をコントロール出来ない。

「俺もこんな病気じゃなかったら、みんなと一緒に学校行ってるし、たくさん遊んで勉強して普通に暮らしてるよ！」

でも……俺にはそんな普通の事すらまともに出来ないんだ。友達だっていない、いつ治るか分からない……この病気のせいでずっとこうやってんだ！

俺はここに座って5年間、ずっと1人なんだよ！ こんな苦しい、つまらない生活ずっとしてんだ。降りたいに決まってるだろう！」

こんな大きな声出したの久しぶりだからか、言い終わった頃には息が上がっていた。

言ってから、俺は何を言ってるのだろうと思い、前を向く。前を向

くと目の前が霞んで見えた。

泣いてる？

俺は泣いてるのか？

手で頬を触ると手は涙で濡れた。なんで俺は泣いてるんだ。手の甲で涙を拭い、前を見る。

目の前には悲しい顔をした一輪がいた。

言い過ぎた……そう思ったのだが、謝れなかった。素直に謝ればいいのに、俺の中にある何かが邪魔をして謝れない。

「今日は……帰ってくれ。」

そう言うのが精一杯だった。これ以上何も言えない。こんな突き放すような言葉しか言えない。

「ごめんなさい……私……ただ……」

一輪は何度も何度も謝りながら涙を流していた。

謝らなきゃと思った。でも、俺は何にも言えなかった。そんな一輪を無視して窓を閉めた。

なんで素直になれないんだろう……。

窓を閉めてベッドに倒れ込む。うつ伏せになりながら横を向くと目から自然と涙が伝った。

なんで泣いてるんだ。自分で言って悲しくなったのか？ 自分では分かってるのに……

自分はこの箱から出れないのに……

改めて自分の状況を理解して、辛くなったのか？
外で飛んでる鳥が羨ましい。

少しして襖の向こう側から母親の声が聞こえた。

返事はしなかった。

母親は俺が返事をしない時は部屋に入って来ない。

こんな顔で母親に会ったら何があったのかと心配する。一輪の存在が知られる。それは嫌だった。

それから、しばらくボーとしてると次第に涙も止まった。うつ伏せのまま何となく、部屋を眺めている。
すると、またしても母親の声が聞こえた。

「俐桜、鶯君が遊びに来てくれたけど起きてる？」

鶯？　なんでまたもこんな時に……。まあ、追いつけにいかないし、来たんだからしょうがないか……

「うん。大丈夫。」

短く返事をするとう鶯が部屋に入ってきた。
俺はうつ伏せのまま顔をベッドに伏せた。

「よお、遊びに来たぜ。」

「お前、タイミング悪過ぎ。」

顔をベッドに埋めてそう言う。
制服姿の鶯はベッドから少し離れた畳にドカッと座った。

体格がいい鶯がこの部屋に入ると一気に圧迫感が感じられる。背も高くてがっしりしている鶯を横目に俺はため息をついた。

「そりゃゝ悪かったな。それより、城崎とケンカしたんだって？」

鶯の発言にびっくりした。城崎とは一輪の名字だ。たった今の事をなんでこいつが知ってるんだ？

「なんで知ってたんだ？」

俺は上半身を起こし、鶯に聞いている。鶯は胡座をかき、後ろに手を着き話した。

「さっきここに来る時に坂の下で城崎が泣いてたんだよ。『私、俐桜君に酷い事言っちゃった』って。ずっと泣いてたんだよ。何があったんだ？」

違う……。悪いのは俺なんだ。一輪は何も悪くない。俺が単に八つ当たりしただけなのに……。なのに、なんで一輪が泣くんだよ。何も悪くないのに……

「俺、一輪に八つ当たりしたんだ。病気が治らない不安とイライラを一輪にぶつけたんだ……。悪いって思ってるのに、謝れなかった……」

また声が震えてきた。頬が濡れる。涙が止まらない。ベッドに顔を押し付け必死に涙を抑える。涙が溢れて止まらない。止めたいのに、止まらない。

俺は一輪になんて事を言っちゃったんだ……

あんな事言うつもりなかった。治らない自分の弱さに苛立ったんだ。

治ると信じて暮らしてきたのに、治らないと心のどこかで思っていた。

涙が止まらない。もう、取り戻しようがない……

「そうか。次謝ればいいじゃん。次は素直にごめんって謝ればいいんだよ。」

鶯は嗚咽する俺の頭を撫でた。

ベッドに顔を埋めて泣く。そんな俺を鶯は優しく宥めてくれた。

「次……来てくれるか……わからない。」

あんな事言っちゃって……もう俺の所に来てくれる事はない……
そりゃ、そうだろ。俺は一輪を傷つけた。

一輪はこんな惨めな俺を救い出してくれた。希望のない俺に優しくしてくれた一輪を俺は傷つけてしまった。

「大丈夫だって。城崎、ここに毎日来てたんだろ？ 人間ってそんな簡単に習慣を変えられる事は出来ないって。」

鶯はそう言って泣いている俺を励ます。

そうだろうか……一輪にとって、俺と会うことなんてどうでも良いこと何じゃないか？ 会って嬉しかったのは俺だけ何じゃないか？

「それに、城崎も悪いって思ってるなら、謝りに来るだろ。その時に城崎が謝るより早くに誤れば良いんだよ。」

鶯はそう言ってニカッと笑った。

本当に一輪は来てくれるだろうか……もう、俺なんか会いたくないんじゃないか？ 自分のこのひねくれた性格が嫌になる。

「お前、何に怯えてるんだ？」

鶯は俺を見て聞いてきた。
はっ？ 俺が怯えてる？

「別に、何にも怯えてないけど……」

「いや、怯えてる。」

鶯は俺の言葉を切って、そう言いきった。いつもの笑った顔ではなく、真剣な顔で俺に言う。

「お前は、置いて行かれるのが怖いんだろ？ 病気が治る治らないのが怖いんじゃない。治った後、一人になるのが怖いんだ。治って学校に行って、友達が出来ないとか、勉強に着いてけないとか。そんな不安でいっぱいなんだ。みんなが当たり前前に出来る事が出来なくて、置いて行かれて一人になるのが怖いんだ。だから、普通に生活している城崎が羨ましくて、今回喧嘩したんだろ？」

鶯はそう言って首を傾げた。

鶯の言ってることは当たってる。

俺は怖かったんだ。小学校の頃はみんなとたくさん遊んだり、授業を受けたり、先生に悪戯したり、野球をしたり……友達がたくさんいた。友達とたくさん遊んだ。

なのに病気になって、だんだん一人でいる時間が増えた。そして、一人でいることに慣れてしまった。慣れたら慣れたで良いんだ。これからも一人で生きていくだけだから。そして、だんだんみんなと遊んだことを忘れていった。

しかし、一輪に会ってからは誰かが近くにいるという暖かさを知っ

てしまった。一度その味を知ってしまうと、もう元には戻れない。

「そうかもしれない……」

俺は仰向けになって天井を見上げた。

明日……一輪は来てくれるだろうか……

「鶯君、晩御飯うちで食べていって頂戴。いつも二人で寂しいのよ。ね、俐桜。」

一階のリビングでゲームをしている俺と鶯に母親が声をかける。

俺たちはキャラクターを操作しながら画面から目を離さずに母親の話聞いた。

別に寂しい訳じゃないけど……まあ、そう言うことにしよう。

コントローラーのボタンの音が部屋に響く。カチャカチャと指でボタンを連打。

「いや、おばちゃんにそんな迷惑はかけれないよ。」

鶯は一瞬母親を見てそう言った。俺はそんな鶯にお構いなしにゲームを進める。

よく考えてみれば、ゲームするのなんて久しぶりだな。操作方法忘れてる。全然操作できない。

「迷惑なんかじゃないわよ。こっちこそ迷惑じゃなかったら食べていって頂戴。」

鶯君は完全に母親の方をみて考えていた。今のうちに一気に敵倒しとこゝそろそろ操作方法も思い出してきたし、今なら行ける。

「食ってけよ。今日、兄弟いないんだろ？ よっしゃ、ボスいただきます。」

「確かに、そうだけど……じゃあ、ご馳走になろうかな……って、お前いつの間にそんなに倒したんだよ！」

俺はゲームをしながら鶯君にそう言った。鶯君は少し考えてからそう言った。そして、また白熱とゲームに戻っていった。

鶯の家は両親が共働きで弟と妹の面倒を見ている。普段は夕飯もこいつが作っているらしい。だが、今日は兄弟二人がキャンプに行っていていないらしい。こいつもこいつで苦労しているみたいだ。だから、俺なんかと一緒にいるのかもしれない。

「うめえ！ おばちゃんの飯久しぶりだなあ〜おばちゃんの料理旨いよなあ〜」

鶯は母さんの料理を食いながらにこやかに笑った。俺も静かに箸を進める。旨いかどうかは知らないけど、病人食に慣れてしまっていた俺にとって母さんの料理は旨い。

鶯の食いつぶりを見て母さんは喜んでいようだ。それにしても、良く食うな……

飯も食い終わり、鶯も帰ってから部屋に戻る。何も考えず、CDコンポのスイッチを入れた。

スピーカーから聞こえる歌をベッドに寝ころびながら聞く。オーケ

ストラを聞き、カメラの映像を見直す。

写っているのは、見慣れた自然の風景ばかり。軽く流しながら見て指でボタンを連打。そんな中、指が止まった。

自然風景の中に一輪の笑顔の写真があった。

綺麗で楽しげな一輪の笑顔。

そんな写真を見ると、後悔と自分の情けなさで涙が出てきた。

CDコンポから流れるカノン。その音楽をフルートで奏でる一輪の姿が浮かぶ。

謝りたい…

そう思い、良い案が思い浮かんだ。

そうだ！

すぐに一階に降りて電話へと走る。電話帳の番号を引き出し受話器を耳に押し当てる。出てくれるかな？

『はいはい〜こちら孔野です。俐桜君、どうしたの？』

眠そうな先生の声が聞こえてきた。

「あつ、先生……一輪のメールアドレス知ってたよね？ ってことは電話番号も知ってるよね？」

『ん？ 知ってるよ。』

「その……教えてくれないかな……」

小さな声でそう伝えると、先生は何か感じ取ったのかすぐに教えてくれた。

『今度報告よろしくね。』

そう言って電話は切れた。

先生……話分かってるのかな？　まあ、いいや。電話の子機を掴んで部屋に戻る。

部屋の襖を閉め、つつかえ棒をする。途中で母さんが入ってきたら台無しだ。

よし……いざ！

第九章

メモを見つめ、電話のボタンに指を置く。

しかし、なかなかボタンを押すことが出来ない。

でも、ここで止まっても駄目だ……

メモの番号を再度確認し、ボタンを一個ずつ確認しながら押していく。

そして通話ボタンを思い切って押して、受話器を耳に当てた。

電子音が部屋に鳴り響く。

『はい、城崎です。』

三回コールが鳴ると一輪の声で電話に出た。
結構速く出てきたのでびっくりした。

「あの、俺……俐桜だけど……」

少し声、小さかったかな？ 聞こえたかな？ そんな不安を抱いた
が、電話の向こうで一輪が狼狽えているのがわかった。

『えっ……なんで？ なんで俐桜君が私の携帯知ってるの？』

一輪はものすごくびっくりしながら、俺に質問してきた。まあ、確かにそうだな。

「先生に聞いたんだ。それより、電話したのは……その……今日の
事を謝りたくて……」

語尾が濁り、だんだん声が小さくなっていくのがわかった。しかし、一輪もわかってくれた様だ。
一輪は少し間をおいてから、聞いてきた。

『なんで俐桜君が謝るの？ 悪いのは私なのに……これじゃ、俐桜君が悪いみたいじゃない……』

そう言って、涙声の一輪の声が電話から聞こえてきた。
泣いてるのか？ なんで？ 悪いのは俺なのに……

「いや、悪いのは俺なんだ……俺は……」

『違う！ 悪いのは私なんだもん！ 俐桜君も気持ちも知らずに、私、自分勝手な事ばかり言って……だから、俐桜君、謝らないで！』

俺の言葉を切って、一輪はそう言った。

謝らないでと言われても……俺も謝りたいんだが……
それに、俺の気持ち？ 俺自身が自分の気持ちをわかってないんだから、わかるはずがないんだ。
むしろ、不安定な俺の気持ちを理解しようとしてくれてるだけで嬉しい。理解なんて難しい事かもしれない。でも、一輪ならわかってくれる様な気がする。

俺自身が、俺の感情をコントロール出来ない。自分がどう思っているのかわからない。

でも、今日のことと唯一気が付いた気持ちがある。それは、きっと叶える事は難しい、いや、出来ない事だと思う。

「わかった、じゃあ今日は謝らない。でも、これだけは言わせてく

れ。今日の事は俺の八つ当たりなんだ。だから、一輪は悪くないんだ。」

『八つ当たり？ そんなことない。私の自分勝手な言動で俐桜君を傷つけたことは事実なんだから。』

一輪はそう言って、少し鼻をすすった。

俺を傷つけたって……そんなに気に負うことじゃないのに……

『俐桜君。』

一輪が俺の名前を呼んだ。

「なに？」

『来年の春に、お花見しよう。俐桜の名前に入ってる、桜を。近くの桜の木を二人で見に行くの。私、頑張ってお弁当作って持って行くから。だから、来年の春にはたくさんたくさん話せるために、頑張ろうよ。』

来年の春。お花見。頑張ろう。

その言葉に俺は泣きそうになった。そんなこと言ってくれる人、今までいなかった。来年なんかに治るわけないと思われ、約束なんか無意味だと……

こんな約束されたの。初めてだ。

『俐桜君、今日、毎日が辛いつて言ってたじゃない？ 私はそんな時、なにか楽しみなことを想像して、それを目標にして、夢に向けて頑張るの。俐桜君にとって、お花見が楽しみになるかは分からないけど、私になにか出来ることなんかこれぐらいしかないから。ね

っ。』

一輪が電話先で笑ったような気がした。
小さい頃、毎年家族でお花見していた。お団子を食べたり、お寿司を食べたり、お父さんと叔父さんと遊んだり楽しかった。
あの日が、戻ってくる。いや、それ以上の楽しみがあるかもしれない。

「わかった。約束だ。それまでに俺はこの病気を治す。だから、その時は一緒に花見に行こう。だから……」

『だから？』

―ヒトりにしないで……

なんて、言えないよな。

「いや、何でもない。とりあえず約束な。……そう言えば、なんで今日はそんなに俺を呼び出したかったんだ？ 何かあった？」

普段、わがままを言うことのない、っというより、自分のやりたいことを我慢して暮らしてきた一輪は自分のやりたいことを言っ欲しくても言ってくれないぐらいなのに。

今日は何かあったのか？ 今日だけしか駄目っていうイベントだったら、申し訳ない……

『えっ……いやあゝその……別に……何でもない！ じゃあ、バイバイ。また明日ね！』

そう言葉を濁して一輪は電話を切ってしまった。

不審に思いながらも電話を切る。そして、一輪の言葉の最後“また明日ね”っと言う言葉を聞いて俺は嬉しくなった。電話を終わってからどっと疲れが出てきた。ベットに倒れて大きくため息をついた。

とりあえず、謝ることが出来た。でも、なんだか謝り切れてない……俺が外出出来るようになったら、今度はちゃんと謝ろう。それにしても、今日は何かあったのかな？

「つで、変な感じに終わったと……」

健康診査をしてもらいながら先生はそう言った。ベットに寝ころびながら先生に昨日のことを説明した。っていうより、先生はしつこく聞いてきたから仕方なしに答えただけなんだけど。

「つで、仲直り出来たのに何でそんなブスツてしてるの？ 何かあったの？」

別にブスツてしてる訳じゃない。俺だって、怒っている訳じゃない……単に気になることがあるだけだ。

「別に……ブスツてしてないよ……」

「いや、ブスツてしてるよ。君は機嫌が悪い時もの凄く眉間に皺が寄るんだよ。今日は一段と皺が濃い。」

先生に言われて手で自分の眉間に触れる。俺って、そんなに分かり

やすいかな……

「速く俺の病気……治らないかなあって……」

小さな声で言ってみた。今の気持ちを正直に話した。

先生は俺の言葉を聞いてびっくりしていた。そして、すぐ少し笑った。

「俐桜君も変わったね。はい、チクツとするよ。」

注射を射しながら先生は俺にそう言った。腕に小さな鋭い痛みが走った。この痛みにはもう慣れた。

「変わった？ どこが？」

注射する先生を見上げて聞いてみる。俺、変わったかな？ あまり見に覚えがない。

「変わったよ。前までは病気なんか治りっこないって顔してた。治ったところでどうしようって顔をね。それが今では、病気は治るって希望を持ってる。これは大きな変化だよ。」

先生は注射の針を俺の腕から抜いて、脱脂綿で針の後のところを拭きながらそう言った。

確かに、そうかもしれない。治らないって思ってたし、治ったってすることはないって思ってた。それが、今は治るのを信じてる。

「それも、一輪ちゃんの影響なのかな？ 恋は人を変えるって本当だね。」

先生は注射器を消毒して鞆へとしまった。俺は注射で射されたところをさすりながら、体を起こした。そして、先生の言葉が引っかけた。

「はぁ？　恋…？」

「そう、恋。」

先生は当たり前のように言い返してきた。カルテを書き込みながら俺の脈を取った。

「これって、恋なの？」

心のある疑問をそのまま先生に聞いてみた。先生はまた少し驚いて俺をみた。

「そうだねえ……俺から見たらそうだと思うよ。俐桜君はそう思わないの？」

考えたことがなかった。今まではずっと憧れだけだった。その憧れが、今はどうなってるんだ？

「分からない……恋したことも、興味を持ったこともないから。」

ずっと病院にいたから、する事なんかなかった。それに興味もなかった。小説とかを読んで軽く触れることがあっても、どうも思わなかった。

「そうかぁーじゃあ、今から言うことに正直に答えてね。一輪ちゃんともっと一緒にいたいって思う？　もっと彼女のことを知りたい

って思う？ 彼女を守りたいって思う？」

先生は俺の手を持ってそう聞いてきた。

一緒にいたい？ そりゃ、いつも一輪が帰るとき寂しいけど。

知りたい？ 一輪が何が好きで、何が嫌いか、何をしたいかなんか、俺は知らない。

守りたい？ こんな弱い俺が守れるなら、一輪を守りたい。親がない悲しみから俺が救ってやりたい。

俺が考えて一回深く頷くと、先生はにっこりとした。

「そう思うってことは、それは恋だよ。俐桜君は一輪ちゃんが好きなんだよ。」

面と向かって言われると、恥ずかしかった。顔が赤くなるのが分かった。

俺が一輪が好き？ 俺が…？

好きってなんだ？ 恋って何？ そう分かってしまうと、これから一輪と接しにくいじゃんか……

「まあ、俐桜君の初恋はなかなか順調みたいだね。上手く行くかもよ。」

先生はニヤニヤしながら、真っ赤の顔した俺をみた。俺は三角座りをして、足の間に顔を挟んで顔を隠した。

「なんでそんなの分かるんだよ。それに、一輪が俺のことどう思っ

てるかなんて分かんないじゃんか……」

一輪は単にお友達としか思っていないかもしれないじゃないか。俺の片想いかもしれない。

「いやいや、君たちを見てたら分かるよ。」

先生はそう言ってニヤニヤ笑った。なんだよ……

俺達を見てたら分かるって、何で？ そんなに俺達分かりやすいのかな？

「よいしょ、っと……じゃあ俺は帰るね。来週は病院で検査するから、入院とまでは行かないと思うから。」

先生はそう言って先生はそう言って、俺の部屋を出て行った。

先生が出て行った後の部屋は静まり返っていた。また検査か……そのまま、ベッドに仰向けに倒れて天井を仰ぐ。いつになったら、治るのかな……？

本を読んでいると、病室に看護婦さんが入ってきた。看護婦さんの手には替えの点滴を持っていた。俺の腕に着いている点滴を見ると残り少なくなっていた。手には点滴の傷跡が惨たらしく残っている。

「俐桜君、今日の調子はどう？」

俺は頭に被っているニット帽を深く被り直して静かに頷いた。黙々

と点滴を替え、目的を達したら病室を出て行った。

俺はまた本を読み始めた。点滴を刺した腕が痛んだ。

視線を本から窓へと向ける。桜の木から風で花卉が舞い散っていた。

「俐桜く飴ちゃん買ってきた……俐桜！ どうしたの？」

お母さんはが病室に入ってきた。ベッドの横にあった本の山を病室に投げ捨て、点滴の針を無理矢理抜いて血を流し、泣いている俺を見たお母さんは俺の背中をさする。そんなお母さんの手を払って泣き続ける。

桜なんか嫌いだ……毎年桜を見る度に、胸が苦しくなる。

俐桜。桜のように綺麗に咲いて、皆に褒められるようにという気持ちを込めて、両親がつけた名前。

今は桜のように散っていく。散っていく桜の花卉が俺。このまま春が過ぎればみんな忘れていく。

そんな桜を見る度に、俺を嘲笑ってるみたいで……むかつくし、情けない……

「俐桜……どうしたの？ 大丈夫？」

俺の手を握って訪ねる。母さんに俺の気持ちなんて分からない。こんな気持ち誰にも分からない。

今日は入学式。

今年で俺は中学になる。

みんな、中学に上がって新しい環境になってわくわくしているなか、俺はこの病室で今までと一緒。

変わらない毎日をこの病室で過ごさなければならぬこの苦痛が、分かるわけではない。

ニット帽を取ると髪の毛が生えかけの坊主とはげの間みたいな頭。腕には惨たらしい点滴の痕。骨髓移植の拒絶反応の傷痕。

何で、俺は綺麗に咲き続けられないんだろう……

遠くに聞こえるフルートの音。うっすらと広がる視界は曇っていた。

（また昔の夢を見たのか……）

まつげに溜まった涙を指で拭い、体を起こす。あのまま寝てしまっただけだ。まだ頭が目覚め切れてないまま聞こえる音色に耳を傾ける。

一輪の音色だ。

この曲、何だっけ？

ベッドから重たい体を起こして、窓へと足を進める。

窓を大きく開き、塀の上で吹いている一輪を見る。

「俐桜君。なかなか出てこないから先吹いてたよぉ……ごめんね、寝てた？」

一輪はそう言って申しわけなさそうに聞いてきた。

「まあね。でも、良い目覚ましになったよ。」

俺は少し笑ってみせると一輪は俺の倍ぐらゐの笑顔で笑った。

それは恋だよ。

先生の言葉が頭でこだまする。そして、少しずつ顔が火照ってくるのが分かった。

俺はそんな火照った顔を隠すためヴァイオリンを取りに一度部屋へ戻った。

ヴァイオリンのケースを取り出し、窓へと戻る。一輪はいつも通りそこに座っていた。

「今日は何を弾こうか？」

俺が訪ねると、一輪は少し微笑み、塀の上に立った。

「今日は俐桜君に聞いてほしいの。私の一番得意で好きな曲。聞いてくれる？」

一輪はフルートを持ってそう言った。

一輪の好きな曲か。何の曲か興味もあるし、今日はヴァイオリンを弾ける体力もないのが現実だ。

「もちろん。聞くよ。吹いてよ。」

俺が少し微笑みかけて答えると、一輪はぱあゝと笑顔になって大きく頷いた。

フルートを構えて吹き始める。

一輪が吹いた曲は有名な「別れの曲」だった。

一輪の別れの曲はとても落ち着いていて、綺麗な透き通った音色だった。CDで聞いたどの別れの曲よりも綺麗で、気持ちがいちいちこもっていた。

数分、一輪は吹き続け、時期曲が終わった。

俺は小さく拍手をして、吹き終わった一輪を見つめる。

「ブラボー。良かったよ。別れの曲か、俺も好きだよ。」

「そう？　ありがとう。別れの曲は昔、子守歌として聴いていた曲なの。だから、小さい頃からこの曲が大好きで……この曲を吹きたくてフルートをやり始めたの。」

別れの曲が子守歌か。

なんだか、ちょっと悲しい感じがした。

「そうか。じゃあ、俺もなにか一曲弾けるように練習するよ。なにかリクエストある？」

俺は特定の好きな曲もないし、弾きたい曲もない。だが、一輪がこんな素晴らしい演奏をしてくれたんだ。俺もなにかお返ししなければ。

一輪はうーんと少し考えて、ふと浮かんだのか俺を見た。

「じゃあ、春が良い！」

ヴィヴァルディの「四季」より「春」のことかな？　また難しい曲を選んでくれたな……あれはオーケストラだから主旋律が色々な楽

器が演奏する。それをヴァイオリンだけで弾くのは難しい。

「ううーん、主旋律だけで良い？　なら頑張ってみるよ。」

俺はそう一輪に返事をする。一輪は首を縦に何回も振って頷いた。確かCDに入ってたな。今日から練習するか。

いつも通り一輪が帰り、静かな部屋に一人。

窓を閉めて、ベッドに寝転ぶ。

ぼーっと天井を見つめていると、頭に鋭い痛みが走った。

しかし、その痛みもすぐに治まった。薬が効いてる間にこんな頭痛がしたのは、初めてだ。さっきの薬の副作用に頭痛なんてないはず。何だったんだ？

頭痛が気になったが、あまり気にし過ぎるのも身体に悪い。気にせずCDコンポの電源をつけ、ヴィヴァルディの春を流す。さあ、主旋律だけの楽譜を作るか。

CDコンポから流れる春の主旋律を探し部屋にある小さなピアノ鍵盤で音の確認。ここらへんは絶対音感で良かったと思う。

少し出来るとヴァイオリンで弾いてみる。完璧にコピーしただけでは面白くない。ちょっとポップ調にしてみたり、とアレンジを加える。

その時、家の呼び鈴が鳴った。今母親はいない。家には俺一人だけ。俺はヴァイオリンを置いてカーディガンを羽織り、一階に降りて玄関へ向かった。

第十楽章

チャイムが鳴り響いている玄関。サンダルを履き、覗き穴から外を見ると、ごついYシャツ姿の奴が目に入った。

「おおい。俐桜いるか？」

俺はため息をついて玄関を開いた。扉を開けると玄関の先には鶯が立っていた。こいつは昨日といい、本当にタイミングが悪いな。

「いるよ。っで、何か用？」

俺は少し不機嫌な顔を鶯に見せる。あくまで少しだ。

「用なしに来ちゃダメなのかよ。折角チョコ持ってきてやったのに。」

鶯は俺の表情を完全に無視し、ビニール袋を持って見せた。もっと露骨に見せるべきだった。

中には板チョコが二枚と、黄金糖が入っていた。俺はどちらかというチョコより黄金糖の方に惹かれるが……

「誰がチョコなんかで釣れるんだよ。本当に用なしに来たんだな。」

俺は文句を言いながら、扉を開き鶯を中に招き入れる。鶯は“お邪魔しまあゝす”と言いながら玄関に入り靴を並べる。

こんなだったら、部屋片付けてからこれば良かった。楽譜が散らかりっぱなしだ。

「まあまあ、気にするなよ。俺だって本当に用なしで来たわけじゃねえよ。」

鶯が二階へと行こうとしたため、制止させる。

「待った……部屋片付けて来るからちよつと待って。」

階段に足をかけている鶯のYシャツの裾を引っ張る。楽譜が散らかりっぱなしは恥ずかしいし、例え幼なじみでも寝間着姿なのも流石に恥ずかしい。

「別に俺は気にしないけど。まあ、いいやあくじゃあ、俺リビングにいるぞ。」

そう言うとき鶯はリビングへと入っていった。

俺は急いで部屋に戻り、机の上の楽譜とCDを片付けてから、寝間着からジャージに着替えた。

それから、一階に降りてリビングにいるはずの鶯を呼んだ。しかし、生返事しか返ってこない。鶯本人が出て来ない。何をしてるんだ？ 気になってリビングに入ると、棚の上にある写真立てを眺めていた。母親はあの写真を仕舞えと言ってもなかなか仕舞ってくれない。

「何やってんだよ。勝手に見るな。」

鶯の持っている写真は俺が幼稚園の頃の家族写真だ。

「いやあく俐桜も可愛い時があったんだなあ〜これ、幼稚園？ 今もだけど俐桜女みたいだな。」

俺だって子供の頃ぐらいあるよ……ってか、女顔は余計だ。一応コ

ンプレックスなんだからあまり触れるなよ……

「つで、本当の来た理由はなんだ？」

俺はソファ―に座り鶯に聞く。

鶯は不適の笑みを浮かべながら俺の横に座った。なんだ？

「お前、城崎と仲直り出来たんだって？」

まさかの言葉が飛んできたのでびっくりした。そりゃ、一輪のことを鶯に話したが、それにしても情報が早くないか？

「なっ……なんで鶯が知ってんだよ……」

「ん？ 城崎から聞いた。城崎に昨日あの後どうしたんだって聞いたらすんなり答えてくれたよ。」

一輪が俺のことを鶯に話したのか……まあ、一輪が良いと思ったのならいいけど……

「つで、その城崎から手紙預かってんだ。ほれ。」

鶯は鞆からメモを取り出し、俺に渡した。

手紙？ なら、さっき話した時に渡せば良かったのに……なんでわざわざ鶯なんかに渡すんだ……

とりあえず、封筒を受け取り鶯に見えないように開けてみる。

可愛らしいうさぎの便箋に一輪の丸っこい小さい字で手紙が書いてあった。

『俐桜君へ

なんだか、自分で手紙を渡すのは恥ずかしいから、鶯君に渡してもらいました。

改めて、昨日はごめんなさい。私の身勝手な言葉で俐桜君を傷つけちゃったね……

でも、昨日の俐桜君からの電話、とても嬉しかったよ。こんな私のわがままを気にしてくれるなんて、嬉しかった。

俐桜君のおかげでなんだか、最近家の人とも徐々に話せるようになったよ。

これからもっと約束して、叶えたら2人で喜ぼうよ。
また、ヴァイオリン聴かせてね。

一輪より』

読み終えた便箋を折りたたみ、膝を抱える。

なにが俺のおかげだよ……それは俺のおかげじゃなくて一輪の努力じゃん。

それでも、少しは一輪の為になれたのかな？　こんな俺が誰かの為になれたのか……

「ん？　俐桜？　って泣いてんのかよ!？」

鶯は俺の顔を覗き込み言った。こいつは昔から間が悪い。

「泣いてねえ……」

「いや、泣いてるじゃん。涙目だろうが。どうしたんだ？　フられたか？」

俺の背中をさすりながら顔を覗き込む。俺は変わらず膝を抱え俯く。

「お前には関係ないだろ。ってか、フられるも何も、付き合ってもないし、告ってもねえよ。」

目尻に溜まった水滴を手の甲で拭い、小さな声で言う。と鶯は驚いた表情を浮かべた。

「嘘！ 付き合っていないのかよ！ じゃあ、なんだよ。なにか悩んでるなら、この俺が相談に乗るぞ。」

鶯は自分の胸を軽く叩き、“大船に乗ったつもりでいろよ”と言った。お前なら泥船になりかねないがな……

でも、先生以外の人にあまり相談なんかしたことない。先生と違う答えが返ってくるかもしれない。それに、用事はあったが、こんな俺にわざわざ会いに来てくれる鶯になら話してもいいかな？

「なあ、俺って……何かの、誰かの役にたててるのかな？」

俺は小さな声で鶯に聞いてみた。目だけ横に向け、鶯の表情を窺う。鶯は“はあ？”と言って、少し呆れた顔をしてため息をついた。

「お前は馬鹿か？」

呆れ顔のまま静かに呟いた。

馬鹿って……そこまで言うか？ 俺の質問がおかしかったか？

「馬鹿ってなんだよ。真剣に聞いてんのに……」

「それが馬鹿だって言っただよ。役に立つも立たないも、そんな関係ないだろ。俐桜は俐桜だし、俐桜にしか出来ない何かがあるはずだ。そりゃ、今は普通とは違う。それでも、お前には今やらかなやならないことがあるし、お前にしか出来ないことが絶対あるはずだ。」

実際、お前に再会してから俺も少し考え方変わった。」

鶯は俺の頭を撫でながら荒っぽく、でも静かに言った。鶯の言葉が心に染みた。

俺にしか出来ないことがある。その言葉が俺の心に浮かんでいた不安をすくい上げてくれた。

鶯の考え方？ 疑問に思い鶯の顔を見上げた。

「お前に再会するまでは学校行くのなんて当たり前だったし、めんどくさいって思ってた。でも、お前と再会した日、お前が俺に学校に行きたいって、本音を言ってくれて当たり前じゃないって、思い知らされた。生きるか死ぬかの闘いをしてるお前を見て、俺は贅沢な奴だなあゝって思った。」

鶯はソファーにもたれ掛かりながらそう言った。

この前、病院の帰りに会った時に言った言葉。鶯は俺の言葉をちゃんと聞いててくれたんだ……

「俺は当たり前のように学校に行けて、部活出来て、友達と遊べる。今のお前には自慢にしか聞こえないかもしれないが、俺は今の今までそれを当たり前だと思ってたんだ。馬鹿だよな、俺。」

俺は毎日注射される事も、薬の副作用で苦しい思いもしたことない。だから、始めは俐桜に同情してたんだ。でも、それは違うって分かった。」

そう言ってもう一度俺の頭を撫でた。

「同情なんかじゃなくて、昔みたいに仲良く遊ぶのが俺にもお前にも良いんじゃないかって。正直今まではお前に会いに行くのちよつと躊躇ってたんだ。お前にどんな話をすればいいか分からなかったし、お前だって俺達とどう接すれば良いか分からないだろう？」

確かに、俺も始めはそうだと思っていた。でも、一輪に会ってから、外に目を向けることが出来てからその温かみが理解出来た。

「だから、役に立つ立たないなんて自分が決めるんじゃないかって、他人がどう思うかなんだ。俐桜は必要とされてるじゃねえか。城崎にもお婆さんにも親父さんにも。だから、お前はお前で良いんだ。」

鶯はそう言って笑った。

俺は俺で良い。こんな何も出来ない俺で良い。

そんな鶯の言葉を聞いて、まぶたの奥から熱いものがこみ上げ溢れ出した。

下唇を噛み締め、自然に熱いものが流れるのを耐えた。どんどん流れ出す涙を手の甲で擦った。

「…っ、ありが…とう…」

俺の小さな声が鶯に聞こえたかは分からない。でも、鶯は俺の頭をがしがしと撫でて笑ってた。俺は友人に恵まれている。

「いやあ〜なんだか語っちゃったが、俺こそありがとうな。俺に相談してくれて。泣きたいだけ泣けよ。辛かったんだろ？ お前、頑張ってるもんな。好きなだけ泣いて吐き出せ。」

鶯の発する言葉一つ一つが心に染みる。涙が止まらない。声を出して泣いて、今まで溜まっていた不安を、恐怖を全て吐き出した。鶯はそんな俺の背中を泣き止むまで優しくさすってくれていた。俺は本当に友人に恵まれている。

晩御飯を作っていると、二階から綺麗で懐かしい音色が聞こえた。この音は……ヴァイオリン？

昔にたくさん聞いたヴァイオリンの音色。懐かしいなあ、手に持っていた包丁をまな板の上に置き、二階に足を進める。

二階の一室からヴァイオリンの音色が聞こえている。

行儀が悪いがノックをせずに静かに襖を開ける。

すると、ジャージ姿の俐桜が窓辺でヴァイオリンを弾いていた。瞳を閉じて音色に耳を傾ける。指を器用に使い綺麗な音色を奏でる。

なんて綺麗な音……

この音色を聞いて私は安心した。

俐桜の心はまだ綺麗。透き通っている。希望がある。

音色というのは、奏者の心が表れる。俐桜の音色は希望が溢れていた。俐桜は大丈夫。

襖をゆっくり閉めて、夕飯の用意に戻った。
なにか良いことでもあったのかしらね。

白い天井。

カーテンで仕切られた部屋のベッドに横たわる俺。
点滴の落ちる水滴の音。

視界が揺らぎ、ボーとする。やる気が起きない倦怠感をひしひしと感じながら窓の外をただ眺める。

カーテンの向こう側では看護師さんたちが忙しく動いている。

今日は検査を受けに来たのに、熱を出し延期になった。点滴をして熱を下げるが、体中の関節が痛く何でも意識を失いかけている。

この数ヶ月で身体が弱くってなってるのが自分で分かる。

すぐに熱を出すし、熱を出すと一気に体力が0になってしまう。昔は熱を出しても結構元気だったのに……

病気の進行が速くなってるのも感じている。治る見込みはあるはずだ。でも、俺の身体が耐えられるかが分からない。

「俐桜君、入るよ。」

ボーと考えているとカーテンの向こう側から先生の声がした。俺は小さな声でどうぞと言うと疲れきった顔の先生が入ってきた。

「調子どう？ うん、薬が効いてるみたいだね。とりあえず今日は帰って、検査はまた後日にしよう。」

先生は俺の額に大きな手を乗せて熱を計った。忙しいのに、わざわざ俺の様子を観に来てくれたようだ。

「うん、分かった。もう帰っていいの？」

身体をゆっくり起こすだけで息切れする。身体が鉛のように重たい。

「もうちょっと、点滴をしていた方がいい。帰り道に倒れられても困るからね。あつ、もう寄り道は駄目だからな。この前は俺がたまに携帯を見たから良いものの、普段は携帯なんて見ないから。」

身体を起こした俺を先生は再び寝かせた。頭の奥が鈍く痛み、重たい。

俺もこの前は正直怖かった。倒れるのもそうだが、一輪に弱い自分を見られたくなかった。

「俐桜君、これはあくまで相談なんだけど……もう一度入院するつもりはない？」

先生は寝ている俺を見ながら尋ねてきた。入院？

頭にハテナをとぼしている俺を先生は悲しげな目で見つめていた。

俺は小さい頃は何年か入院していた。しかし、中学に入るぐらいに退院して、家での病僚している。

退院したのは、抗生物質の効果が出てきて、だいぶ回復に近づいて来たからだ。

「やっぱり、俺悪くなってるの……？」

先生に素直に聞いてみた。

再度入院しなきゃならないってことは、病状が思わしくないからである。

それは、自分でもうすうす気が付いていたことだから、そう言われてもあまり驚かない。

「……そうだね。やっぱりってことは、うすうす感じていたんだろ？　もう抗生物質に抗体が出来始めている。でも、これ以上強い

薬を使うには、家ではきついと思うんだよ。」

俺の頭を撫でながら先生は言った。

入院。これ以上強い薬。

その単語を聞くだけで、怖い。

「入院……したら……治るの？」

自分の声が震えているのが、分かった。

入院なんか、良い記憶がない。

でも、入院して治るなら……

「治るのかって聞かれたら、それは答えられない。でも、今よりは良くなると思うよ。確かに、最近病状は良くない。でも、回復してないとも言えないんだ。」

先生はそう言った。

俺はその言葉の意味が分からなかった。

病状は良くないのに、回復してないとも言えない。どういうこと？
良く言葉の意味を理解してないと悟った先生は補足した。

「つまり、今の薬では回復はしない。でも、次の薬なら治る兆しが見えると思うんだ。でも、その薬は拒絶反応が出たら怖いから、その薬に慣れるまで入院して欲しいんだ。」

先生は一生懸命に説明してくれた。

慣れるまで……？　ってことは……

「慣れたら……退院していいの？　少し楽になるの？」

先生の裾を掴んで、震える声で聞く。

だって、その薬が使えれば楽になって、今まで以上に動けるんだよな……

「そうだな。薬が俐桜君に合ったらね。もし、合ったら今まで以上に楽になるかもしれないね。」

「じゃあ、入院する。その薬、使ってよ……俺耐えるから。」

決心をして、先生に俺の気持ちを伝えた。
どんなに辛い副作用だろうが、治療だろうが、耐える。

だから、もう一回外に出たい。
もう一回……一輪に会いたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6967n/>

花卉の舞う坂

2011年11月21日18時57分発行